



089616-000-9

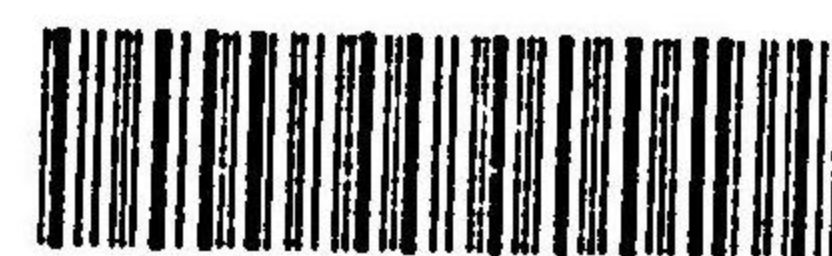
特11-154

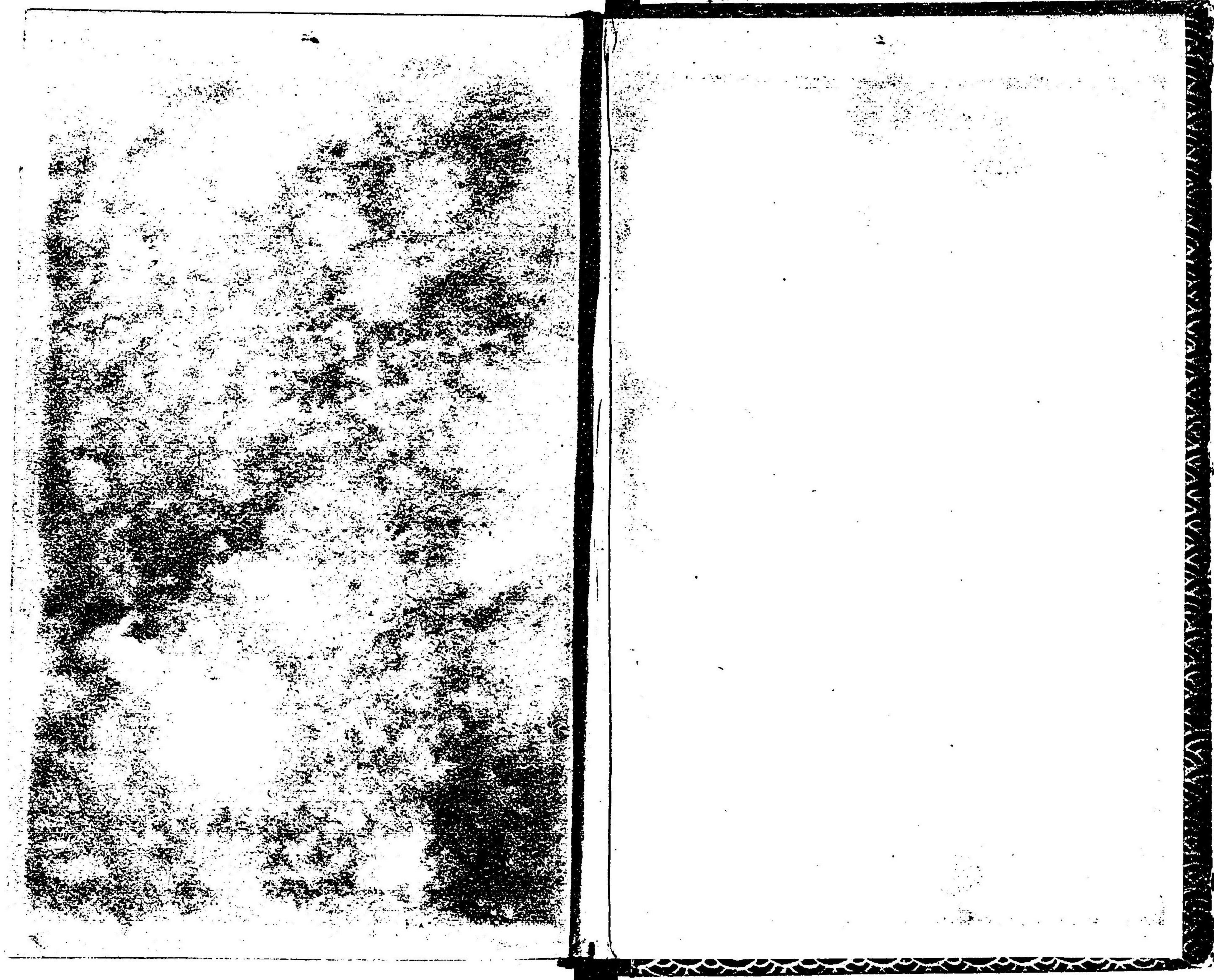
花曆八笑人

滝亭 鯉丈 / 著

M19

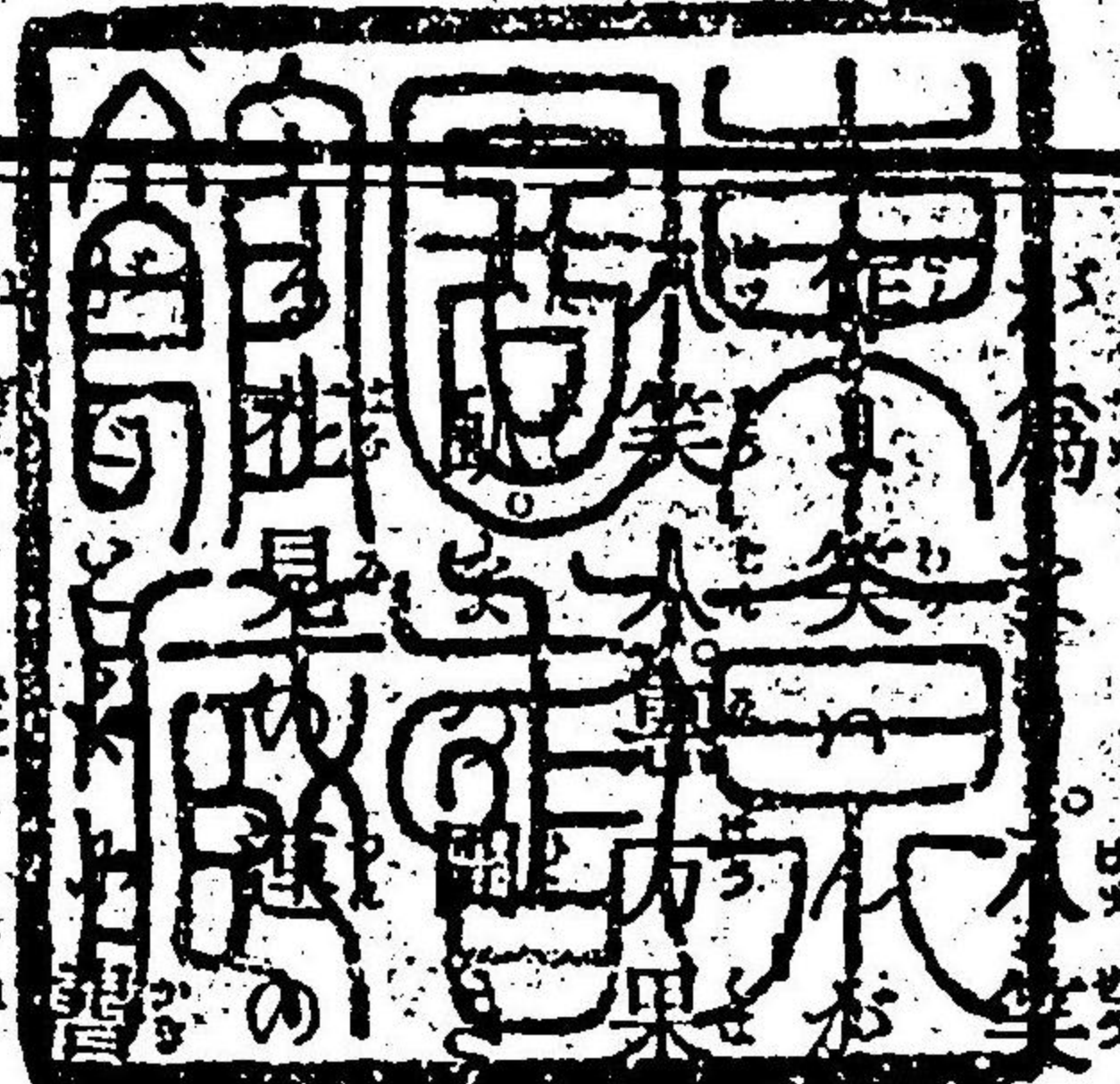
DBM-1808





花曆八笑人序

明治二十年二月十四日内務省交付



曆を披て八將神を見るは吉方を知萬事を行ん
 人を開て花曆を忘る阿房を見て戯
 爲かり夫の惠方の年徳神是阿房の
 報の寐て待とも根ふにかへらぬ花の
 たる吸筒の口ふ出るま酒落を吐た
 一群が現ぬかして戯るさまを觀る
 綴りし友人瀧亭經丈かりそもく
 根岸の里の根かしごとをとり出て谷中の谷の底を
 も穿つが瀧の川よの瀧飲の盃を傾け不忍の池お

○花曆八笑人

初編

○序



○花暦八笑人

初編

序〇三



○花暦八笑人

初編

序〇二



高聲の調子をも忍ぶを飛鳥の山も今日を忘れて日
 暮の里も晩鐘を恨む何ごと山も昔を忘のびて道
 灌山吹破れた衣あと實のあき地口を囁るたぐも
 皆是酒に戯れ花にうかる、人心もして實も愛た
 さ春の夕暮櫻の花の王子の神社此方に向ひて畜類
 のむた口をもとめき小便無用花のやま萬よと野も
 小初瀬も此大江戸の花にゝあかきまたおほ江戸の
 花見の日記の四季の名所の春もあかきと千社參
 りの豊丸正矢立の筆を繼足して櫻戸の端に記すこ
 とあかり。

琴通舎 英賀



ハ笑人遊行日

春 庚辰年の飛鳥山の花の雲
 辛巳年の角田川のさあ花
 夏 壬午年の高田の里の螢うる
 癸未年の両國川の涼あき
 秋 甲申年の百花園の秋七草
 乙酉年の海晏寺の楓うる
 冬 戊戌年の青樓の夜の雪
 己亥年の浅草寺の年の市

いふ。わけがわるめへ。これ則いひあやまつて居るからのことだ。子曰こッは
 の火と論語にもある。夫でたわいのないすぢがわかるだらう。あ、歎いしことだ。
 ちツと學問をするがい。五の日に在宿いたすからチトきげんを聞ながら來さッ
 一。一。二七三八四九五十日濟貸で押分られめエ。あ、なる程屁の講釋の感心だ。
 おめへの博識でいねへ物ひりだらう。左次郎「ごうく。そりやアい、が卒公日ぐらし
 どふしたのだ。なに屁でまぎらしたから屁ぐらしたらう。一。どうも此奴が此通こし
 をふるから噺ができねへ。安波公ちツとだまらッせへ。やかまし口だ。一。いや、聞
 ねへ。奇妙な趣向で花見に來たが皆一ぱいうつげれたのよ。さすがのおれせへまじめ
 だと思つた。一。あよこそがのおれ。へん小刀のまがりが開て果れらア。一。東西く。で
 アどういふ趣向だ。一。聞ねへ。うまくすぢを書アがッた。一。はてな。一。聞ねへ。すッぱり
 どうかつがれたぜ。誠によく、まやアがッた。聞ねへ。一。一。はてな。一。イヤこてへられ
 ねへ。一。エ、こちれッてへ。ごふしたのだ。手前ばかりがのみこんでなんだかわけが

わからねへ。一。いんニヤよ。聞ねへ。一。聞て居るよ。ひとつの噺に聞ねへ。一。が百五六
 十出らア。はやくすあげろ。一。そんなら。かいつまんで噺そう。まづ本舞臺三間の間。い
 らめん又櫻の立木。上の方よ黄簀ばりの茶見勢。一。これぞ。つまんで噺すに其餘こと
 ないらねへわな。一。いや、聞ねへ。其出茶屋がすぢだいな。そこの娘が十七ばかりで岩
 非半四郎。瀬川菊の蒸。げいの大吉衆三のちやッびいに生養二片入。煎方つねのごと
 しといふ美女だらう。聞ねへ。その亦腰かけに居た野良が甘才ばかりでいづれ金満
 家の息子株。色のまろい。いやみなしの梅幸團十郎。持物衣裳つきの御推量。一。モシ。
 是に生養のはいりませんか。一。またく。ひかへるく。一。そこでその容が暫く休
 んで茶代を置いて表へ出合がしろ。でんぼうらしいやつが二人。門口で突當たといふが
 いひが、りで喧嘩よ。それから聞ねへ。其色男をの。聞ねへ。むじくぢらのめするん
 だから。聞ねへ。一。いや、聞てゐるよ。一。流石あすこの事だから人の黒山のやう又集
 ッて見て居るけれど。誰一人取支る者もねへ。おれもめんまりかわいそうだから中へ

はいつてやうく、兩方へ引分てやつたら。ギツたやツらひとなりの茶見世へはいる。色男、其娘の所へ這入る。其處で娘の氣の毒がッている。介抱して、お髪とまア。かりよわたくじでも結て上ませう」と鏡臺を出して結にかゝると開ねへ。隣りに居るぶつたやつらがいつの間にか調子をあつせて。ちやん、「楠等鏡臺取崩へ」「ト長五郎髪すきの場よ。そこで合方よなると聞ねへ。その野郎が梅幸の身振聲色で。娘をわいてよいろく。おもしろいれありよ。日暮里中の人をすつぱりひツかついだが。なんどおもしろくかついだまやアねへう。まうし重かつたらう。山ぐるみかついまやア。」「んニヤよ。うまうかいたまやアねへか。」「ム、こりやア、。それとも古いかまらねへがおもしろへく。」「こりく。」「なんど此連中でおかけやうまやアねへか。おめへたらがぶらのめし人で。おれが髪すきよ。おらア亦成田屋で這るべし」と團十郎のこわいろよきり（ふしぎなるんでいかいお世話よ）。「エ、よしてくれい。そう思ッたばかりで胸がわるくなつた。」「其顔で髪梳どころか。かみつさうだア。馬土明のうしろで流返しのか

みどきが、眼「へんそねめく。のう安波公。催ふそうまやアねへか。」「その流返しの方なら御多分よの洩ますめへ。」「チヨツ。いめへまじい奴らだ。とかくおれがいふ事の取用ねへ。」「ろんならこうちやう。他の仕た通りもされめへから。自分で茶番のころもろで一趣向づ、案て。自分の書た正本なら其狂言のたてもものよするがら。」「ム、それで役不足がなくなつてい。ろれよしても此顔ばかりでいさびし。野呂松や出目介のどうしたらう。」「そうよ。けふの大分遅ひ出仕だの。」「なアよ。みんな昨夜から二階へ行だをれた。やんに眼公モウおこさッし午刻過だ。」「さうだッけ。」「ばんおびやかしてくれべし」とまゆらばらまのまよて「かいとんく」とつまながら「オイ。みんなが蘇ッ生らねへか。最う日が暮るの」「二のいよて八人げいの三きけがこゑで七「ヒヤア。どうもハアばらまわんべいで症氣のせへか。どたまがやめて起られましねへ。」「其等だア。昨夜のひどく食ッたぞ。オイ他の倒れ者のどうだ」「二からいていまひどりの野呂松といふ男是も八人げいの小僧の聲色。」「へい私のエ、ハ、ハ、ハ、ハ、症氣の

やうな。色氣のない病におこりませんが。エ、エ、エ、血の道のせへかエ、エ、エ、
 せうもエ、エ、エ、眼が覺まませんでござりますぞ。辛「とう／＼馬鹿アいりずとりのやくお
 ささッし。急な相談が出来た。眼「なほ。そんな甘口でいくのぢやアねへ。皆々ひッぱが
 うしと眼七。卒八。安波太郎三人二階にぬがり夜具を殘らす引まくればよろ／＼起て下
 へくる。左「とさよ斯言相談だ。此連中で花見茶番と号して。田目介の半分さかづ。出日「オ
 ット皆迄宣ふな。殿前より二階よゐるてやすすの不殘うけさまはり。ごん「とくより趣向
 致して御座る。野五「いご鎌倉といふときニヤ。われらが智計をばどこぞに。ごん「せかいの
 女のみなごろし。表のたより頭分六ト云男「香友公御スィ、エ、エ、エ、びい／＼
 てん／＼つく／＼つく／＼てん／＼。左「イヤア奇妙これで群勢の若到のすんだ。こう兼ば
 けた奴等ハ早く顔でも洗て飯でも食ッし。そこで頭分六。かういふ案だ「オット承知
 〳〵先刻此所へ來かッて。ぞッと這入も智慧がねへから。何ぞ一番かッぞうと思ッ
 て。そッと障子の蔭も身をひそめ。工夫の始終不殘聞。直高案の定ておいた。あは「いや

はや。どいつもす早い奴等だ。さア／＼此方ハ大變だ。さッぱり心當りのねへせ。左「何
 さ。ソ一狼狽ることもねへ。今日から始て一日ハ一幕づ／＼だから。その中出來た者から
 先へやらかすがい。さア今日の初日のたれがする。ごん「ものごとすべて手始が大事だ
 庸意あるものよらせられめへ。まづさしづめおれたらう。野五「なんのまたさし出るよ。
 先日の茶番の手なみでどうして初日が勤るものか。さア／＼初日ハおれだ。左「熊
 谷。平山。待たまへ。争ふうち日がたけるから中々どッて亭主役よ。おれが始やう。出日「
 ろれがい／＼。ごん「一えて其趣向ハ。なんと／＼。左「まづ筋ハ敵討だが。こうと。役割ハ
 色の黒いでく／＼と肥満た眼の大きい髪ひやくまやの悪くまといふ面がほし。○
 ム、安波公やッてくだッし。立敵ごぜ。あは「立敵ハい／＼が顔の容色があつらへ通じやア
 うれしくもねへ。眼「オット狂言方の割つけた。面不足をいふない。左「そこで着つけハ黒
 羽二重の紋付ハ萌黄博多の帯。朱鞘の大小。中ぬき草鞋。深編笠。といふことしらへだ。あは
 「ム、い／＼。左「おれと出目介が順禮のすがたで。そこ爰と花を見ながらたべこそ香

で居る所へ安波公がのさりくど山かけて来る。それも同じくわちこちと見あるさ。成丈人の目よかゝるやうよして程能所で順禮またべこの火をかりやうとすひつけよかゝる。笠の中を覗て。やアめづらしや鳥目百見。年来尋る親の敵ど。是くら浮木の龜や。優曇花のはな。なんでも彦兵衛で(彦兵衛とハぼぞんじの通言。うけあひのこと)かもしれ。ならべ立やう。安波公も出さるめのせりふで。不便ながらも反討だど。偏笠をとつて捨。銀貝ばりをすらりとぬく。おれと出目公の枝は仕込だやつをぬいて先達茶ばんよ仕組だ立合になり。ほどふだ。辛「そりやアどうせへだ。飛鳥山の此友達ばかりで花見をする様だらう。いゝなア〜」左「そこで亦眼のしよぼくたした。鼻のひらつたい齒の黄色。氷ッばなが鼻のまんをかよたへず。ぶらついでゐるといふ面がほしいな。おい〜頭分六。ちよつとおめよかゝらう。つが「はい〜大体の私が似よりかね。辛「似寄どこか。南瓜を二つよ割を其儘だ。つが「ナヨツいめいましひ。爲方がねへ此節柄だ。この首で間よ合そうなら。お大事のものだが心置なく遣ひ玉へ」左「其様よ力を落すことハ

ぬへ。役廻りの助高やだぜ。六部の出立でちやん〜と鉦鑼をならきて來かゝり。切結ぶ中へ割て入。まばらく錫杖であしらひながら(某一言いふことあり。まばらく〜)と惣方引分て笈を下し。中から酒肴三味線を出ておれよ渡すと。ちやん〜ちやんと。と弾出から出目公と頭分公が。エ、ハ、エ山できつころぐした松の木。根ッこの様でも)と唄。安波公が例の跡跡の者も見物よ交つて居て。直よろこへ跡込で大酒盛となるといふやつだ。野々「イヤさてれつ〜妙斗さア〜ちツとも早く押しだそう。あは「そんならまア。いせうや道具を早く。くめんしよう。左「眼公。てへぎあがら例の處へ行て借て來て下ッし(是ハ茶番一式の損料屋など)入用の今いふ通りだ。順禮の杖のも。大小も。銀貝がいゝせ。まかしおひするの脊中よ千秋萬歳や。大入叶でのチト中だのう。正うつしで行てへもんだ。辛「それはいいゝさんだんが有りやす。どうせ六部の笈も本ものでなければ諸色が通入めへうら。山崎町へいッて六部の形ど。おひづるの借てえよう(是もまゝかの地よ出来合の順禮六部の損料あり)左「そんならうして〜んねへ

あゝおかし。じ。むだらうな。卒「じいむも坂東も一所も書て有せ」左「エ、わるくしやれ
 すと千手觀音のらうらもねへのを早く借て來さッ」と卒八眼七をせき立ておい出し
 左「ママそれでもさッたが。なんぼ出たらめでもちッといさッかけを付て置う」と是よ
 り稽古にかゝる。左「ママ山田公ぞめれの程のいゝ所も居る。うこでもおば公も同トく是
 さまア立ッせへな。うらうくうこいらがら。うこでもさッかけの圖武が山の下で鉦を
 た、く音と合圖よ。たば公がめば公をつめて」順禮殿火を「つ」をろばへくる。あむ、
 よーく。左「あ、よし〜じやアねへ。こゝへ來さッしな。おけびる。さん」たば公が。
 おばこそ香々やア。たばると。ませこ入れがらるの。左「エ、まやれるなへ邪摩よなる。
 サアたば公た、ねへか。野郎「マ、マ、マ、ヤッぱり。たを公たア。あ、おんきた」こり
 や〜順禮びろうながら火をひとつかまやれ。左「なよ。それよびろうがらるものか
 左「S、ち〜。うこで。とすい付る笠の内をのすらて」やアめづら〜や鳥目百味。なん
 じを尋る其爲よ。らく年月のかんなんくろう。供不職天の父の仇。サアおんじやうよ勝

負〜「ママ出目公もなんぞからわッし」おら〜「辨才天の御由來くわしくた
 づねる母の敵」これサおらもまやれて手りむらマラけねへの。身まみさッしき。
 うしておれが父の仇とらぶのに母の敵とらぶ事もねへ」ねめへが父といふから同ら
 、草も智慧がねへのら。うびておる衆だ。左「さや〜うんな智慧り出せねへがら。う
 してむづかしくらうすをあたうもへよ。うまの龜。うせんげの花。こゝで逢ふたの
 天のあたへ。とかなんとか紋切形でいゝわさ。左「うせんよ花巻なごもやッていどうだ
 らう」何〜まやれたがッちやアわり〜」おんきたらうんならうせんげの花。う
 きんの龜。こゝで逢たが百年目。左「どうやこッちの夜ばたらら。二世より先へ命づな
 どん」懸の盜とたれぞら波。ばんニヤイからと合言葉。左「さやもらうらもならねへ。此
 又へらばうがみんだ。さやみさのまをまやアがるの。ママらとままんをせず居て下
 ッし。それでなくッてせへまやれたがッていけねへ。ママ〜てへびあよして置う。サ
 めばおらッて見さッ〜」んおれが〜」こらするから名乗て聞さん。よッ

花接落

こころみくらりく

花さか山

りてんそらり

花の石か

花さか山

花さか山

花さか山

花さか山

花さか山

花さか山

花さか山

花さか山

花さか山

花さか山

花さか山

花さか山

花さか山

花さか山

花さか山

花さか山

花さか山

花さか山

花さか山



花さか山

花さか山

花さか山

花さか山

花さか山

花さか山

花さか山

花さか山

花さか山

花さか山

花さか山

花さか山

花さか山

花さか山



くくく此時幸八は笈を背おひてかへりしが。此ていを見てさるをつぶし。おや
くこりやアどうしたのだ。大へんく。行暮たる旅の修行者。此大雪にゐんぎ至お
く。エ、しやれ所でのねへ。まア早く来てくだッし。あバ公。尻がやける。早く
わさへのかねへか。と引立られ顔をまかめおがらう。云ん端へ出。うこへすわ
ぶッし。おい其さいはいを愛へくんさ。まア目をまッかきとねむッて居たり。おやれ
く。目も鼻も知れなくさッた。まアい、こッちへ来さッし。まア着もの着替さッ
し。尻のびまよぬれた。おん、此着物を替わして町内をへんまひらせるが、一
寐小便も此とし迄やまねへから。もう直るめへよ。あ、く。いてへぞ。誠に目
がくらんだ。おんど左次さんもうちッといたくねへ趣向の有るめへか。アハ、ハ、ハ、
ハ、何さ。飛鳥山に箱火をぢがなにかうい、とみなく大わらひにあり。此時眼
七も諸色取そろへてかへり。道具のそろッた。こう今道で未時を聞たせ。
仕組がよく出かけねへか。人の出さかりでなくッ。ヤおかしくねへせ。うらうく。

稽古もあらしすぢが通ッたからい、として出かける仕度になら。とれ眼公いせう
を見せなむい、奇妙く。黒羽二重。朱鞞の大小。編笠ど。マアあバ公渡すぜ。まッ
ちの杖斗だ。さアく着替たく。是よ役わものもの。おもひく。のこあらへ出来て
左。先是で支度い、が。ちと腹がわりいあ。そうさ。今日のめづるままだはじめ
ねへうら物わすれをまたらやうだ。おんど翁をこあらへよさか。何くそんな事をま
ていられねへ。イヤおかー弁當がある。眼公そこらへいッて見つくろッて来てく
れねへか。雨もちるに。すしなんぞもいせ。あ。あ。ますい物やのにしめもおそれる
ッ。そして鮮もこひねがはく。長門といさてへな。長門すしとんごた。馬喰町
よ。此男もあのですしやを知らねへか。なんぼおれが物知りだ。とッて。どうしてこい
らまで知れるものか。コレサ一の評判十八町といふハサ。へん牛の小便を文字ッた
此か。わるくごたつくせ。何でもい、から早をばたらひて来さッし。うして笈の中へみ
んな詰て。圖武州の足跡から出かけさッし。おんア茶碗で二三盃ひッかけて先へ出

よう。なア出目公「む。それがい。まアおれからはじめよう。ア、咽がぐびず、
 る。「やれくいちのさたねへ男だぞ。そんならてんぐにまよう。まらそうだ。ま
 是へついでくん。左「そりやアい、が順禮明を承知か。オット氣づかひ玉な。例の美
 音で女どもをまよわせてくれべい。ふだらくやさし打波のおのれのみ。あは「む。くだ
 けて今朝の物ごとと思へ。紋切形だの。左「まアく、あが公出かけねへか。あは「く。
 もう「つ。ついでくん。いやもう。あされたいおきたなだぞ。そんならおれもモ
 一盃やろう」どまけすおどらぬ底ぬけ上戸。左「二郎のよろしくたち出て」まアく、お
 そひせく。今からそう香でつまる物か。是からが大役だ。ばかしくし「とこいど
 かく手を取って引出され。あは太郎の編笠ふかく打ちひり。出目介。左「一郎もあひづ
 るをふどころに入。すげがさよ顔をかく隣家とまのひ出て行。引ちのへて眼七歸
 来り。眼七「まア肴もリッばは出来た。なんと重詰のされいたらう。辛八「おれく。眼「オッ
 トそれからどうしろ。辛「なんだな。まだ見へもあねへ。喰ふといやアあめへ。おう

ぎと用心をするせ。野「すみ所のよある黄いろい物のあんだ。眼「どれ。野「是よ。眼「オッ
 ト其手くくねへ。だん「その手をくくす。此足を喰う」どさくを煮まてやられ。眼「エ
 、ぶぢやれるない。きたねへ。笈か出すのだからきれいな事だ。ぐつちやアいけね
 へから。折角骨を折て話させたよ。ナヨッだいましよまた。辛「おれく。ほんよあア。お
 れが直してやらう。眼「んニヤ。たのむゆへ。もうく、ぞつそうだ早く笈の中へ納めよ
 う。まアく、地藏さま。御さうくつあがらひろい所は嫌ておいでまら。と笈佛を引出
 し三味線。酒肴諸色を話込み。錨錠をぴんとおろして。眼「まア是で安心だ。づぶさんか
 ぎをわたすせ。あは「あ。よじく。あ、考かおれ。一ぶん難義な役だまア。行つくま
 での道中がつまらねへ。まだあんでも酒の氣をはおれて出来ねへ。もう二三盃やッ
 つけようか。眼「エ、さるさく香たがるぞ。まアわらぢでもはきねへ。其内かんを直し
 てやるから。づぶ「む。そんならこらへもッてきて下ッし」ど上り端へ出てわらじを
 はく。眼「それ笈よ。ちッとおもひせ。辛「まアく。かえが出来た。香ッしく。づぶ「は

〜。是の傍ほちやでござります。とふすもちつと大きな物でお願ひ申ます。野郎「これさ〜。い〜かげんよ春で出かけね〜。先へいつたてあしが待違だらう。眼」ぞうよ〜。おいちたちも跡を片付て出かけよう〜。」と追たてられてつぶ六の異ある形をこと〜もせず。酒氣又乗せて出てゆく

編者曰本文六ページ五行目の(大吉祭三)十一ページ四行目の(彦兵衛)同五行目の(銀貝貼)十二ページ十一行目の(山崎町)杯と云ふが如きも皆諸君御知了の事件なるべけれ「ト云もの、着官多き中よ何の事ぢや堂云物だとお疑ひの方も亦少きにのあらざる〜因て二々其所は註解を付んとしたれども却つて煩らひしきゆゑ茲之を略す然れども編を重ぬるよ従ひ追々種々なる符牒言葉等もありますに付き自然にお氷解なる様注意て出しますから段々貳編三編と出版の都度順を逐て前後御照讀下さる様に願ひます」イヤ此様な言ア云すともこの事だ〜。ハイ左様なら〜

花曆八笑人

初編巻の下

江戸 滝亭鯉丈子著
東京 深川梅園翁閱

ふりばおし。ふまねばゆかつかたもなし。通づくし山櫻かなど赤染右衛門の詠けん。花の山里多かる中に。わけて江都の飛鳥山。植人もおやき花盛。吉野初瀬もおよびなき。ろの山ふみも遠近より。あらしひさそよ道草の。花見連中。霞ととも引つ〜。春の日あしや足元も。よろめく山のつ〜らあり。酒のとがとも岩根ふみ。たをるか〜への出茶屋に。きせんとあらばぬよしを圍む。花より團子の下戸上戸。かの酔狂の團武六。六部の姿に出立て左次郎が宿を池の端より谷中の方へいそぎ行。最早隣家も程すきしと。心落つき少し稽古の心にて。ちゆせうらしくも鉦打ならし。なま〜だぶ〜。なま〜だぶ〜「六十餘りのばまさま」アイ六部さん。まんせませう〜とら〜れて〜び〜。つくりせしが。こ〜ぞ大事と〜どふ〜より。こしをか〜めながら「〜」。是のばや有がどうござります。へ〜。是のばや〜。〜を頂上行〜

き。ばあさま摩かけ、これ六部さん。ほら、お返しをあか火をなせなごらねのてどがめられて又びつくり。ハッと思へど例の押さずぬかちぬ顔よ。今いたす所でおどります。口より「へい。何とらいた彼とらへん。目やねむり。口もむくくしてむせうに。餌をちやんくく」。あはらくして「どうも心當りの出来じや。」「まへん。如是畜生ほつぱだいある。南無往生安樂國。あたまをだくく」。あはらくして目を開てみれば。ばあさま見へすはッ。い。おれくおたるらめふ逢た。もう念佛の申さぬ事だ。丁のぶやき。い。さぎゆうしるよりねら。六部さん。せんせませう。つぶ六ぎよとせじか。聞付ぬふり。早足で行すぎるを。うしろより笈をぎッかりおさへてうぶか。い。い。言だれだ。コレをされるわ。卒公か。野呂松か。い。おけるなく。い。まばやく引合し。事の外せき送しこあ。おれが見付て。一寸も先へやらね。い。や。や。貴様。こなた。おのれく。此聲におどろきよく見れば。店受の判入といふ親父あり。けふ上野へ

詣しついでに圖武六が宿へ奇し所。母女房圖武六が身持不始末のわけ。又此ほど五日も香つけ。宿へのより付ぬ。い。い。折あらた。い。た。い。これよ。の。ま。れ。て。其歸る。ことなるなりをみるよりも。正しきうとやうのかたあやち。何か少しもゆるすべき。かなつんぼうのどらば腰をふりたて。い。これ。何がまぬ。かあ。お袋や女房を捨て六部に出るのだ。おれもよん所ねへ事なら。なせ相談づくで出ね。の。だ。役。に。さ。ず。な。が。ら。も。こ。な。た。が。居。ね。へ。日。よ。お。お。れ。い。し。り。お。少。か。ひ。を。背。負。返。み。だ。わ。圖。武。六。い。ひ。わ。け。せ。ん。と。思。へ。ど。判。入。か。な。つ。ん。ぼ。な。れ。ど。大。き。ま。て。こ。せ。り。い。つ。も。仕。形。ま。て。咄。し。を。き。る。ゆ。ゑ。笑。佛。ゆ。び。を。さ。し。か。む。り。を。ふ。が。是。前。せ。う。だ。ん。だ。花。見。よ。あ。く。ま。い。ふ。思。入。よ。て。鼻。と。目。へ。指。さ。し。す。る。判。入。い。なん。だ。六。部。よ。出。る。も。い。や。だ。が。よ。鼻。と。目。が。殺。よ。た。ね。へ。コ。レ。を。れ。も。い。か。ね。へ。こ。か。も。と。し。の。よ。こ。ぬ。お。ま。き。さ。ッ。か。り。と。療。治。を。し。て。一。年。も。毒。だ。て。を。き。ん。と。口。の。す。く。な。る。ほ。ど。ま。ッ。て。も。甘。日。も。た。ぬ。内。も。もう大酒をくらって悪物喰。たつたひとりのお袋が。ない。た。を。わ。ら。た。り。く。く。う。

るき屁ども思はぬ。みんなぢぢだつ。「なまこ。どうぞり口へ」又くふふして。齒を
 むき出してゆびよつ。き見せ。又四文錢を壹文出し。ちらのなまへゆびよし。齒波よ
 行とおしえ。笈の中酒や辨當だといふ氣どりにて。笈へゆびよし呑喰するまねをし
 てみせる。判八「よ、あんだ齒四文。ひ、橋本町。這入て此笈で喰氣だ。イヤハヤこちた
 も生若いごまごしてふがいねへ男だぞ。コレ親よゆずられた家業でなへままな廻ッて
 くへねへものが。壹文貨で親や女房が。くわせられるものか。」エ、こぢれッてへ。そ
 うでもねへ。そんならもう仕形がねへ。此内を明て見よう」と眼七よ受取し笈の錢を
 奪れども。ちよつとたもとへ入置しが。いつかふを落せしと見へ。「一向知れず。いか
 へせんどろろたへながら。きせるの吸口よて錢をこト廻して居る。此押合の内往來の
 人。ひとりふたり立聞せしがだんくもつまり何かりまらず。六部と親父と問答をす
 るといふちらせば。近隣の人我もくとはせ集り。さん時の間も。黒山のおとく入立せ
 しかバ判「これ此通り人立がきて外聞がわり。まアくおれど一所内へけへらッ

せへ。何も彼もうちへいッてわけを付るがい。圖武六も尤どお思へども。此ごまにて
 宿へも歸りにく。又飛鳥山の千等も相違するとゆる。何ぞかして引ばつさんと
 先へ行なせへ。跡からすぐよくと手まねをすれば判「いやく。そらうならぬ。貴様
 先へたッせへ。おれが跡からつひて行」トいさまめあらく。中くがてんするけし
 きなければ。彼是長居するほど。外聞あしく。心ならをも元來し道へ立歸る。判八のう
 しろより。笈の角へ手をかけながら跡へつひてわゆみくる。是より圖武六が宿へ歸
 れば。母女房のいふもさらなり。近所の人且家主まで集り來り。異あるさまよおどろき。
 家内大もんちやくとなりたれど。圖武六の茶ばんの手等相違せんと。兎角いへくるめ。
 此ま、出行んと花見の趣向を荒増いひわけすれど。多勢よいひそくめられ。取おさへ
 てうごかさねば。笈の扉を引破り中の仕込を見せ。くわしく咄聞せようくみあぐ
 得心の色見へければ。はや。春の日の長しとへ。店受の起勢。家主の理屈。隣家の意
 見。女房の愁談。大わらひと成。茶番の寂滅。入相よ。飛鳥の花いかよせん。圖武六も

御輿を居て有合の酒肴どり出して。みなくそれくも禮をのべ。心あらずも酒汲か
 わす。斯ともまふず彼の三人へ。日暮邊のうらみちよて。それくも支度を直し。左「わ
 げ公。爰からわかれて先へゆかッし。そして美しそやな慕張を見て置ねへ。なんでも勝
 負の場所の女澤山の所と究より。あほ一承知く。女の目利なら。へソ外の者に出来ぬ
 へ。左「よし。さく。さく。こころばねへやうに早く行ッし。是をわかれて出目介。左
 二郎の引さがッて。ぶらりく。と日暮し。道くわん山をたどりながら。左「出目州。何だ
 かおかしな足取だが。あんまり香過たぞ。例のたてのおぼつうねへもんだの。左「なんの。
 おれが歩行形よりおめへびづかしろふだ。左「馬鹿をいハッし。おれに間違が有る
 物か。おのたて斗りのおげ公がよく香込んで居るよ。どうも足下がけんのでならぬ
 へ。左「なにサ。あんじるな美味やッで見せよう。そがしとッて。と見へに成て後の鳴
 物が。かわらうといふ所から少じ。とッちる所が有る様だ。左「と。双方から打込
 と真が兩刀で請る。ト少々の気配なり杖にておしつ。左「さら此方の刀を引く。左「お

れも引ばつじて又打込む。ト同じ杖にでまねをする。左「わが公がおれの方へ。たみ
 かけてくる。とんく。と二足なびッて平居て受る。左「所をおれが。後から打込む
 を。わが公が左の刀を逆手より受留る。とだんく。はづみなりたる所へ。西國
 邊の或武家の藩中と見へて二人連。強物作りの侍。此後へ来る。こららり。一向心
 つりす。左「そこで。わが公が鼻の先へひらりッ。トかの侍の鼻先へニユツと杖をつき
 出せ。侍のびツくりしながら。杖をまッかりおさへ。左「シリヤ。何をきをる。慮外千万
 な奴けへつこつ喰たる身分の以て。武士をてうろう致しおる。出目「エ、是は免なせへ。
 大きよ麻相いたしました。左「やアけへつ今さら鹿相ちらうて屁込するとも。其ふんよ致
 うかせへし。此捧を突付おるみぎり。わが公が鼻面へらうとおいどもが面へ突かけお
 ったでねへか。わが公など。秀句の如云あッても。矢張おいどもが面の。みツちちの
 事承知しておるわい。ア、おめへ。大たん不敵な奴。かやうなる奴原生置いて。
 のちく何事を仕いづるもはかられん。せへわい此こる求し此新身。筑五郎殿。登人づ

が大事ぢや。先刻よりの過言今さらこうけへいたす」ト風なみ直れば兩人はろせいぎ
 た心持して「今迄五分でも引さどつた事のおざりませんけれども。さうも敵を打ま
 をよめ。成丈あやまつておられませんと。さうもそこが「あどく」だらぬとをあらへたて
 るを。左二郎の打け一目をばせにて。出め介をよらみつけ「いやもう。先程の慮外と
 おもるし下されますも。矢張親共のかけみや付添。助けくれまどかどろんとられま
 る」トろら涙をこぼし。うは「袖をめて」何時を限りと定めもなき。うきイかアんなア
 ん。其上めぐり逢ましても。方一返り打よならうかもア。知れません」ト老ぼくどす
 る。兩人の侍もまきりよろれひをもよふし「何さく」。左様な不吉を申ものでね
 へ。孝子よは天の助ちうが有る。さかし其やあてらうの手強やつり「左様では座り
 ます。同ト家中よ名を得たる。劍術師範の。へイ名のもうしよくうは座ります。成程。
 尤の事ぢや。承へるよ及むぬが。何にもいたせ萬端何角。深勞の段察しおる。思ひま
 も眼水の催ふした。さ。手を上られい。本望どげられたその上。尙又いつかどのほ出

世でおざらう。我くとも同ト仕官の身。斯承王の上何れ共及ばすながら御推
 舉致し度。御同様高下のござらぬさめく」ト言葉も直り。ていねいのめいさつよ。出
 目介の頭よのり。又さし出る「ハイく何もう是が勝手に座ります。斯く身を落し
 ますからは昔の氣を出してのいけません。たごへ内に金の茶釜が有ると申ました所が
 はじまらぬへ理屈ではざります」左二郎の出目助が口をだすたびに。ひやくして又
 ならみつけ。長居をしての化の皮があらわれんど。まきりよ。けんのんに思ひ「是に
 大きに遊山の邪戸を致しました。最早おわかれ申ませう」成ほど。此方のも
 かくり。人目を老のばるゝかのく方。人立致しおるで。さぞ心配でおざらう。あゝ名
 残のおしまるれども。是非よ及ばぬおわかれ申す。筑四「武道を磨く我く。不斗かやう
 なる孝子に行逢も。武門のめうが。今日の即アち吉辰は。筑五「老のぶんとも身を大切
 に。本懐をたつしめされ。御縁もあらへ重て貴顔の待ませう」と残り多氣に見返りく
 わかれ行。げよらちつよきり武士の表裏のなごけ深かりし。跡にふたりのぬくめ鳥

の曉を待得し心地にて。五色のためいさ。惚つとつきやれく。とんださいなん
 逢たのう。とさい難どころか。命を拾ったア。これ。ちつと氣を付さつし。どうも鹿相
 つかじいからこんな目。逢れた。どうしてまた。あの侍の鼻面へ丁度杖を突懸たらう。
 からア向をむひて居たから後から人の來るのも知れね。等だけれ。足下。あの時こ
 ちをむひて居ながら侍士の來るのが知れね。事も有るめへよ。ばか。じい。う
 うさ。どうして見付なんだかさ。どうもおらア藝事にかゝると夢中。成てならねへ。
 なんの藝。大相だア。まだしも顔へ突かけて疵でも付ねへで仕合。あのいきほひで疵
 でもつけて見たが。物のいす。スバリひつこ扱てやられる所だ。お。おろしい。
 思つても。ぞつとすらア。ほんよおろしい事。のう。まかしあの侍も。あんまり短
 氣な手合だ。こつちもわるさ。悪いけれど。殺まほどの事も有めへ。おやアねへか。なん
 ぼ此方連だ。といつて。犬を切つた様。もいくめへす。こつちが死ね。先も解死人に出
 るだらう。とんだことをい。こ。こ。武士の威光だ。こつちがだア。といつて仕舞

ど。死人よ口なしよ。い。やう。理を付て慮外もの故手打。致いた。此段御届申へい。
 左様から。と濟で仕舞とな。それだから町人の割が悪いわ。馬鹿ア言ねへ。町人だど
 って。茄子や大根を切る様。うう手軽く濟ものか。こつちにも荒神さまも大家様もあ
 らア。急度うういふ筋のものなら屋敷方へ出入の職人の。武士を相手よする商賣。皆
 向から待が來ると待てぬねへければならねへ。どういふ同連でおさる。エ、イべら
 ばうめ。だんくつよくなるな。らんならおせさ。大粒な涙をこぼして泣た。おめ
 へも。へそく泣らう。おらがの傾城泣といふので。目へ袖を押付て。こすりあ
 らすと目淵が赤く。うるんでくる。そこで又せりお廻しで。と。それ。あれから侍
 の氣がおれて來たらう。足下。又手。ば。アリ。一粒拾六文位な涙を落し
 たり。鼻の先へ綱渡りをさせて鼻の中へ。ま。名付て野田の下り藤とい
 ふ涙をこぼした。おやアねへか。へ。おれも傾城泣。おめへの様。するの。昔の傾
 城泣。目のふちへつばを付たり。のみりけて有茶を付りして。袖でこするなんぞい。

く。がまんをいふな。く。く。ア。ハ。ハ。ハ。ハ。併しうれい。が。物言のちツと氣を
付さッし。むだッロやへらず口いれる達者だが。少しまじめな事の無體なもんだせ。何
だらう。ハ。左様奉りまして。如何奉ります。お腹立を納め奉りますッ。ヘン。大山へ參
る山伏の様だ。一。そうい。あさん。あ。い。ふ。こ。け。い。あ。が。め。だ。い。す。き。だ。う。れ。し。が。る。者
ぞ。一。あ。が。め。と。ッ。て。ど。う。し。た。し。と。言。所。へ。ぬ。し。が。ら。ふ。の。り。と。う。奉。り。ま。し。て。
といふからわけがわからぬのだ。せめて仕りますならい。ふ。一。崇るから奉ると
言のよ。ちよッといふにも崇たてまつって置といふじやアね。か。あ。が。め。仕。と。も。あ
が。め。致。と。も。い。ふ。人。の。ね。へ。一。エ。ノ。口。の。へ。ら。ね。へ。べ。ら。ば。う。だ。あ。ん。と。で。も。あ。か。せ。二。ろ
りやアそらと大きよあろくなッた。あ。び。公。が。う。ろ。ろ。く。し。て。待。て。居。り。ふ。一。う。ろ。ろ。ち。ッ
と。さ。り。出。さ。ら。圖。武。六。や。外。の。奴。ら。い。ど。う。した。ら。う。一。な。に。是。も。先。に。成。た。の。サ。あ。れ。く。
サ。ア。く。向。か。ら。來。る。の。は。も。う。か。ら。擗。に。し。て。歸。ッ。て。く。る。せ。一。は。ん。に。あ。ア。エ。年。増。が
見。へ。る。あ。ア。あ。く。醉。た。わ。く。く。ど。う。も。女。の。よ。う。け。る。程。醉。て。の。ち。ト。中。だ。よ。何。で。も。櫻

色で目のふらがすこしとろりと來たくらるの所が千兩だ。一跡の新造の足下の詭らひ
通りだせ。出。ム。く。こ。り。や。ア。た。ま。ら。ね。へ。く。一。な。ん。だ。く。見。へ。る。な。い。い。く。ら
衣紋を直したとッて。笈摺。二柄摺でい。な。さ。ら。ね。へ。よ。せ。く。一。チ。ヨ。ッ。い。め。入。ま。し。ら
あ。ア。も。う。も。う。こ。ん。な。く。わ。だ。て。に。一。味。え。ね。へ。だ。馬。鹿。く。し。い。人。の。花。見。よ。出。る。よ
や。ア。借。着。を。し。て。も。見。へ。る。の。よ。此。さ。ま。い。何。の。事。だ。ら。う。一。な。ん。の。さ。さ。ぐ。事。の。ね。へ。着
物。は。ど。の。や。う。よ。立。派。よ。も。出。來。よ。ふ。が。類。の。皮。辻。着。替。ふ。れ。や。ア。え。ね。へ。一。う。ろ。ろ。い。な
さん。あ。馬。士。よ。も。い。せ。う。だ。一。我。が。形。り。を。見。て。一。へ。ん。公。家。に。も。襦。袢。で。い。な。さ。ら。ね。へ。一
所。を。馬。士。に。も。襦。袢。だ。も。の。を。何。分。納。め。奉。ら。れ。め。へ。ア。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。一。あ。ん。の。か。か。し
く。も。ね。へ。事。を。一。ど。か。は。を。ふ。く。ら。す。一。剛。氣。と。ふ。さ。い。だ。な。ユ。レ。途。中。で。見。へ。り。に。來。り。ま
ね。へ。飛。鳥。山。が。か。ん。ま。ん。だ。さ。ア。く。い。こ。お。う。く。一。ト。是。よ。り。道。を。早。め。て。行。な。が。ら。往
來。の。花。見。を。さ。ま。ぐ。ろ。し。り。な。ど。し。て。た。か。の。れ。ら。が。お。こ。な。ひ。の。み。を。通。り。も。の。と。心。得
たるもおかし。〇。是。の。扱。置。め。バ。太。郎。の。ど。く。よ。り。飛。鳥。山。よ。い。た。り。趣。向。の。場。所。を。定。め。お。か

たきやめれ

神楽のまじり

まのまじり

花のまじり

りし

日く

里より

たん子まや

鳴保

花より

後

日

花

と

花

琴通舎



んと。遠近ぶらつくらら。ハヤ酒氣もさめ。うす淋あく思ども。今を盛りの花の山。貴賤
 老若じれくも。小竹筒破籠を取ららじ。さすがは廣き飛鳥山所せきまで居並て。うた
 ひつ舞つ餘年もなき有様を見て。あは太郎の猿狂言の役者のおどく。茶番の事も打わ
 すれ。浦山しげのさりく。と見歩行を。花見の人々うろんよ思ひ。殊も女中のさみ悪
 く老ろく。と目を付れば。例の己惚たッぶりよて。心さろく。さめども。何とさよ
 るよすがもなく。左右うろくする所へ。宿に残りし四人の者よ。はしなく行合。卒八
 の小聲にて。卒「おい。あは公。まだかく」。あは太郎の有頂天にて。あ「おい。みんな早か
 ッたあア。きてれつ」。あはさん有卦に入り。敵役替ッて色事師となる。この編笠を
 ほうり出して。ちうげへりがきて。卒「どうした。狐にでも化されのまねへか」。あ「まア
 向の茶屋へでも。ちつと休ら。あは公も一所に歩行ねへ。連のふりせへまねへければい
 へ。あ「む。そうまよう。おれもちつと。うけて貰ひてへ事が有る。皆へ「何だか。むせう
 になれか。りううで氣味がわりい。おかわでも買て来ようか」といへ。さま茶屋の庭に

腰をかはながら「これ〜。早速さがらだが。今日はと女目付らきた日ねへせ
 みんな編笠の内をのぞき込だり。又見る様で見ねへ様で。いや成程色事の花見の事だ
 せ。なぜといて見ねへ。女の一跡。陰気なものだよ。よって物事が都而うちばだから。
 女が男をくどくといふ事めつたよねへもんだ。所が花見といふやういふの様な陰気
 な人も陽気なる場所だから。男増りよ女の方から持懸る様も成ると思ふ。」これぞ。
 マアさうした。ほんよ氣味が悪い。狐でもつきりまねへか。マア氣を随よまづめさッし
 野郎。「そして左次さんや山目公の來て居る様子。一なアよ。まだそこじやアねへまア
 聞ッし。凡江戸廣しといへども。飛鳥山の花にまかばさ。飛鳥山廣しといへども。」と向
 の方へ指を差し「あれあの櫻。ノ。あれの一昨年植たのだせ。七小町といふ名札の立て
 居る。あの木の元に纏居したる一群。おんでも大家の奥方と見へるが。上下ひッくるめ
 て甲乙なしのどろびいだ。『なに。あれが盗人の女房か。』エ、わうらさば。ひッ込で
 居る。是。どろびいとの硝子を逆といふことだ。『アハ、ハ、ハ、ハ。うぬ斗り吞込で居

てさッぱりわからねへ。』ろれがまアどうしたといふのだ。『いやさ。何も取まきッ
 て。こうといふともねへが。さッきからかれが行廻り。かん廻り三四度も。あの櫻を見
 て居たろう。さうするとそれまで何か高笑ひをしても。まんどあッてころ〜。嘶よ。何
 か聞どれへちねへが。目引袖ひき。いそ〜する様子。いそ〜する様子。いそ〜する様子。いそ〜する様子。
 く〜してだるひ様だが。どうも言寄るてだてがねへが知恵が有から借して下ッし。友
 達のよしとだ。『アハ、ハ、ハ、ハ、ハ。いやはや。あされたまろものだ。足下も鏡の
 ねへ國の人でゐるめへし。女三味もてへげへにまきッし。今日の形の拵へがあつり
 きだから。先でもふ氣味に思ッてまろ〜見るのだらうそりやア茶人の女でも有なら
 間拔でい〜とか。ちいひさくッてたもあろひとか。名を付て惚めへものでもねへが。氣
 心も知れねへ初對面から。ほれられよふといふ面でも有めへちやアねへか。『何も
 そんねへに手ひさくといふすといふわさ。おれだどッてちッたの切掛もあると思ふか
 相談するのだ。』野郎。『ハア。それぢやア少し出來勝手な當りでも有のか。』『さうよ。』

る程。いや待ねへよ。こつちが十分見くだして斗りゐるから。まんこうがねへけれど。惚る心持に成て見た所が。こうつと。先が武家育よこつちが武士の忍び出立。着付の黒羽二重の紋付。萌黄博多の袷帯。ぐつと伊達に朱鞘の大小と。むい。い。わへ。浮面相の編笠で見へす。下から覗て見た所。鬼髪だが。まア是も青髪と見るさ。むい。い。わへ。こいつア。どうか取結び様が有りそぢなもんだ。卒。「ろうよ。首尾よく成就また所で笠を取ると。手付損にして。おことわりだらう。こいつアおもしろい。」「へん。それ迄にこぎ付れば面よハかまわねへ手くだで殺て見せせい。何にせよ彼の幕へ入込む手段よこまる。卒。」「まア。花見の場で心安くあるのハ哥だなア。ちよいと梢よ付た短冊を先で讀で。又返哥の心持で短冊を付る。あんうんといふ様赤事がまア早い手廻しだが。あ。」「いよ。作者。」「妙案。」「こいつア。きつとい。まかしたんざくに困るな。卒。」「おにそれの鼻紙の端をささかたて。ちよいとよりかけに。」「の。」「むい。成程是以てさそくだな。卒。」「なんの是もたすとものことだ。ひどくかたくほめるせ。それい。

が歌ハ出来るか。あ。どう考て出来るものか。おめへたら考へてくんねへ。野呂。」「そんなつまらねへ色事師が有るものか。あ。それだどつておれにハ出来ねへものを仕形がねへ。香公考案てくだッし。卒。」「どうしてそんな。お人か。なことを知るものか。あ。是迄にして腰がおれて。い。や。い。卒公。眼公。野呂松。これ拜む。卒。」「それだどつて。むりな事斗りいッたもんだ。ついそたべた事もねへものと。野呂。」「何でも自作でこぢつけねへ。あ。」「なんのおれよ出来るくらゐあら氣ともみねえねへ。さ。なんのおれに卒公なんぞ。あ。初午だの天王様だのに。ハやりながら。いちのわりい。友達づく。と云もの。ハそうしたもんぞやアねへ。卒。」「それの地口や川柳點だいな。あ。」「それでも。卒。」「馬鹿。」「地口で色事が出来るものか。せめて狂歌ならい。い。けれど。あ。」「むい。其狂歌が。い。い。」「さ。其狂歌が出来ねへといふことよ。あ。」「なんの。乙甲なこと斗りいふからはじまらねへ。エ。どうするものか。ねへ。昔とわきらめよう。やッぱり縁のねへのだ。其替り此末おめへ。たちに。どんな事が有ても。おらアまらねへといふから。其時腹をたらなさんなよ。

ませてきざッし。そッとだせ。「おッと承知だ」トはりり行て兩人まめし合せる。卒「あ
 ば公ぞッかりさッしかんじんの所だせ。一へん。美味やッて見せよう」ト帯なを直
 し。まづくと歩行ゆく。左二郎出目介も。つちつま合ぬ順禮うたを。ろこ爰うたひな
 がら。程よきところよてゆきあひ。「こりやく順禮。火を一つかきやれ」左二郎の
 まだ。たばこも香ぬ所ゆゑ。エ、氣のきかぬと。腹の中での思ひながら。うるたべ火打
 を取出し。たばこ吸付。「へいへい」。さアお付遊しまし」ト編笠をのぞいて。「やア。めづ
 らしや鳥目百味。年來尋る親の敵。」「ぞんじやうも勝負く」ト是より廻りざりあひあ
 らましこと付。たがひみ笠をかなくぐりすて。刀を手をかけ結寄れば。ろれけんくわ。い
 やかたきうちと。所せきまで居ならびし。野遊の人々上を下へとそうそうし。重箱か
 へて欠出す有。辨當はこをけちらすやら。吸づゝをふみくたき。毛せんをかむりよげま
 ぶふもあり。たゝかなへのわくよひとし。こなたのはや被合什組し如く十分よ切結び
 もはや圖武六來れかと思へど。山の下通にてちやくとかねの聞ゆるのみ來らざ

るも断り。此うねの音り。三とき幡隨院勸化の。ぢゞゞはゞアの集りしなり。三人のた
 ての仕組種ぎれとなりたれど。一向圖武六見へざれば。せんかたなくも。へしなやあま
 なぎちらし。たがひにいさもされ。つかれきつたるこの所へ。さづくよか香のたりけん。
 さいせん道くわん山よて出合たる。彼の侍貳人。さげ緒たすきよ。うしろはち巻かひ
 がひしく出立「やれ。ちんりやアたち。助太刀やす」トい。さま兩人壹度に氷のごとき
 だんびらと。真向よかざし。三人が中へおどり込。左二郎。出目介びつくりぎよらてん
 左「それ。あば公。早く遊さッし」トい。あがらわわてふためき遊出せば。あば太郎も何
 かはあらず。持たる刀もほふり出し。もくさんよ遊出す「やアひきようなり。おとれよ
 ぐるどてよがそろうの。やれ順禮。さか切付ぬ。後袈紗よ打掛けぬかやア。エ、持の明
 ぬ」と齒が子をなじ。刀をふッて追かくれど。是もよはを吞過しと見へ。歩行も自由な
 りかねるやうす。三人の最早一生懸命と下道の方へ飛下れば。木の根茨よ突か。も「衣
 るい手足のわからもなく。ばらがさになり。のたり廻ッてよう」と下道通りへ下り

ければ彼の侍も見へざれども。今にもあまよひ切付られるこゝらにて。三人ばらばら。我先よと根岸通りをよう／＼に。命から／＼と逃歸る。跡に四人のものども。なげちらしたる諸道具取あつめ。すぶ／＼と立歸りたがひよつ／＼がなきをよるこび。又圓武六も夜に入て漸やく。家内をおさめ出來り。途中にて店受に引返されし始末など。ものがさりせし。はては大笑ひとぞなりにけり。

編者曰。マテ是より池の端の酒狂亭に集ひし八人の者。更も場所を換て一運動すべしと。遂も野呂松が發起よて。隅田川花のまがらみ。と題し押し出しさる向ふ島に於て種々なる趣向に涉り江戸大評判となりたる大笑ひの事件の第二編を委しくあり。且二編は挿書も澤山あります。當編は續ひて娯覽をへい相變らず願ひます。但し貳編の總て書も密めて彫刻も別して念を入れ升から出版の今十五六日間のありき。すが併し何程遅くとも借月二十五日より後る。様なか氣遣ひの決して無い手筈であります。依て其節の續々御高覽と重ねて希ひます。

八笑人第二編序

そも八笑人のらんちやうといッは。僕生質家事よろみて。遊戯あかくことをおらぎ。謂日不食貧樂とやいん。されど清貧をたのむ器にあらねを。ひぢを枕の樂その宅に居る事をさらひ。花と月と心を移せど。孔伯といふひやうさんものを連されを。今に其たる事を忘れ。故にかくありたらんかと思ふ程を。春の日秋の寢覺くよ。うつ、心のうつけの數く。書ちらしたる其反古を。八笑人といかづけしあり。或人予ふ問て曰く。彼小冊何の爲め著述する哉。予エヘンとせきをさらひをしおがら答へんとして行つまる。嗚呼いかおせん勸善懲惡の趣かく。益の有無を辨ぎ。サアそれのエ、と口塞を

笑連 集戲 之圖



○花曆八笑人 第二編卷之上 ○序三



○花曆八笑人 第二編卷之上 ○序二



○花屋八笑人

第二編卷之上

○序五



○花屋八笑人

第二編卷之上

○序四

見て彼人の高わらひひてそとりて曰く。いかゞ大先生無益の業を
 今あそぶるらめ。看者の滑稽あうみて拙著の愚あるを笑ふ。さすれ
 ば不及下根つひやすのみか。廣く愚智短才を引札するあひとしか
 らぎや。ア、はづかしくひかを作者ぶり。ア、いたひ哉かた腹。ア、ひ
 やく冷ッあひかを掌中の汗と。あらべたてたる悪口あまたへ兼
 たる門首。幸よく来るの板元あり。八笑人の後編のと。僅促されて鼻
 高く。エヘンくとせきせらひ。そとりの人をとりかけ。序に
 似たものをかくのごとし

文政四辛巳春

瀧亭主人 鯉丈誌

花曆八笑人

第貳編卷の上

江戸 瀧亭鯉丈子著
東京 深川梅園翁閑

久かたの光りのどけと詠じたる春の日のうちかき。かせたる野邊は若草の。もゆ
 る煙が立霞。山懐に早わらひの。にぎりてふしを開くより。盛りたがへぬ花曆。年々
 さいく相似ても。日々夜々の花の形。同トからざる詠に。心の花も櫻頃。うき立つ
 空に陽火の。ちらく見ゆるほる酔に。樽を荷ふて行娘。花をかざして歸る老父。賢愚
 貧福押なべて。うかれ遊行の時なれや。彼八笑の遊人の。花見につれて催ふしの。茶番
 も昨夜飛鳥山。其仇打も仇事にて。打の遠寺の入相おろ。花ならなくた散々に。追ちら
 されて漸々と。八人彌池の端。酒狂草へ集ひ寄る。左次郎出目助の疲れのみかろて
 爰と。摺刺疵や打疵へ。一心不足萬能者。酒にて用ふ無名圃。此人物へ合薬か。即刻廻る
 酒氣に連れ。猶こりづまの。後日の趣向。これ。みんなが香で斗り居ては。まらねへ
 せ。あしたのだれがする。ほんにそらよ。志か。初日をいた。ひたか。すこしかく

れが来た様だ。野郎「何の。そんなけちなこんじやうでいけるものか。そんなら己が一番座直しをしてやるべし。」左「む。おもしれへ。筋の出来てるか。」野郎「はうすんに有やす。鶴屋南北。櫻田治助。べて鶴田南助と言ふ新作だ。まづサツと。」卒「大それた觸込だが。すべてゼツと。」と言出す。断におも一れへののねへもんだ。野郎「エ、やかまじいわい。もうませッけへまやアがる。まアだまッて本願を聴聞仕つれ。エヘン。そこですッ。エ、又顔を見やアがる。」左「これサ。どうしたのだ。いのみやッて手居ちやア譯がわからねへ。サツとでも。サツとでも。」として。其先どうだ。左「このかの道見板をばつすが。」野郎「い、さへわかッたよ。」左「イヤ。わかッたまやアねへ。まアみんながらッと洒落こなしと極てまッくろい。稽古するから。せ。是から斯するがら。」野郎「む。然した。宜らす。」野郎「エ、未何をも云もしねへ。ハ益しひ。エ、總て洒落で混ッ返す者。」野郎「洒落百。過料を取とするがよからう。」左「こりやア。ぶちのめすよりうへから。さくだらうまめ。」野郎「野郎公必置さくはなしねへ。」野郎「よし。」と。まア洒落らや

あやれる。翌日の小遣ひだす。そこでまづ大びらみゼツと向島に。卒「む。それか。」野郎「それにどうした。」卒「どうもまねへ。こッちの事だ。」野郎「エ、五十が物の有が。ナユッゆるしてやれ。そこで先。」卒「野郎。」野郎「あんだと。」卒「痛みがするやうだ。」野郎「エ、此男もむづかしひ事ばかりいふ。まづ荒増正本をはなッせへな。向島でどうするのだ。」野郎「かう言譯だ。まづ隅田川花のエ、い、まがらみといふ名代で。」左「ふん。大相なおびやうしたの。」野郎「リッぱは聞せて置ておれの形が。エ、ハ、ト。まむせへ布子のあちこち綻ちどが有て泥が付たり。綿がぶッさがッたり。帯の細か何かみて冷飯草履ど中貫ど。うたらんばにはいて川越の辨當のさいといふ手拭を。くるくと米屋かむりといふ拵だ。」左「何故そんなむづかしひ手拭を冠たのだ。」野郎「めんどうな理屈のねへ。ごん公のをかりてかぶるのサ。」左「呑公足下の手拭のどんかを見せなごん。」左「これよ。」野郎「是が川越の辨當とやらか。」野郎「おめへも野郎にぐとく聞せ。醬油でひどく煮染た様だといふ事よ。なんど見てもものとがわくたらう。いつ買たかま

らねへか。ちつとせんたくでもすればい。」「大きにお世話。お茶でも」のまねへ
 でこてへられるものか。手拭を見たらのどがびり／＼すらア。是を思ふと己アはんに、
 もつてねへせ。まづ手拭。小遣。小菊。撰良。小娘。もから仕送る。衣類持物等。年増分。
 後家のたぐひ。」「このべらぼう尻ツクせのわりい。又いびつたれを去やアがる。」「さ
 ア／＼百だせ／＼。己からしてまぜッけへ去やアがる。以後外の者の見せしめだ。」「
 何に／＼。是は狂言についひての咄だからまぜッけへし去やアねへ。」「向島の趣向に
 小娘や年増だの後家だのが入用か。」「入用でいねへか。向島だからそんなものも出
 よふでいねへか。」「そんなら小菊や。こくぶや。小遣がいるか。」「うれも壹文あしでい
 いかれめへ。」「煙草も香だらう。鼻もかきまア。」「何々言譯はくれ／＼。おんでもた
 れた／＼。」「エ、めんどうな。けつをひんま／＼ッて改メさッし。」「うれより腰の錢入
 をひッばづせ。」「あ／＼。あやまつた／＼。出すよ／＼。エ、うるせへとツつくない
 どうも男の肌ざわりの氣味がわりい。まづさきれたア。ナヨツいめ／＼。うれ。うれ百。

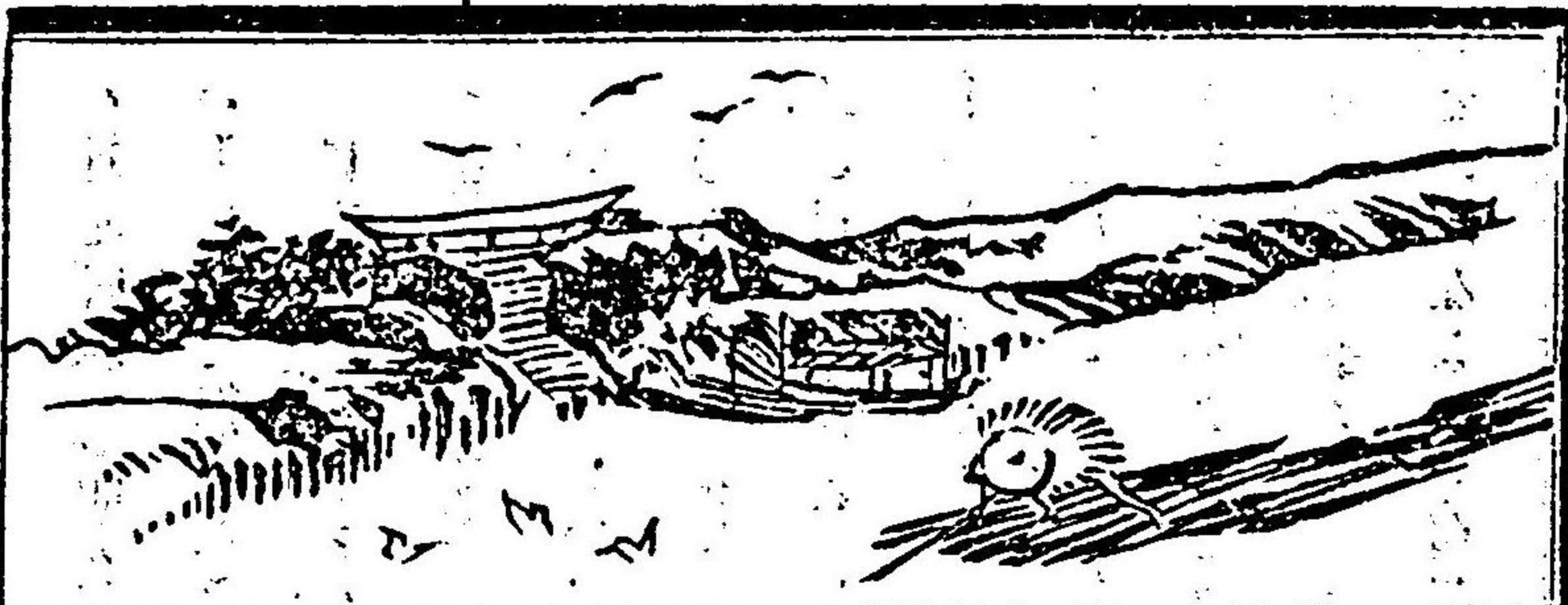
へん。とんださいなんだ。」「あんまり人の事はかりわるくいふからい、氣味だア。わ
 らッてやれエ。あア／＼。」「ひん。智惠のねへ笑ひごまだ。さア是
 から本讀よある、りあがるが。さいつでもぐッともぬりすと百ふんだくるぞ。」「さ
 うせい。へむづかしさ。ぐッともわりさか。」「わりさ。」「うれでいおくびもさ
 れねへか。」「む。さふねへ／＼。」「尻。」「もちろん。」「さやはや。あされた馬鹿ど
 もだぞ。さアそれさ。」「どして置てはあし合ひどうだ。」「おれが手拭を借てかふせれ
 ばどうするのだ。」「うここで土手通りをぶら／＼。草履の古いのをひろッて腰へぶらぶ
 げたり。そら笑をしておどツたり。何でも出たらめに去やベッて歩行のだ。」「こいつ
 は大當りだらう。」「なんの。あんさまであるいたどッて大當な事があるものか。こぎ
 たねへ。」「うれだからよからうといふのよ。此又面であり斗りマッばでいうつらねへ
 へさ。」「ナヨツ又つらを持出しやアがる。うちらやッておけへ。」「ほめるのだア。」「
 ほめられてもられしくねへ。」「さ／＼。」「そこでそれ斗り去やア有めへ。」「さうし

てく。是からが山だ。先其形で牛の御前くら秋葉近邊。足にまかせてはツツまゐるくもんだから。定て人のどろどろ付て来るだらう。左む、く。一それの扱置こゝにまたサ。三圍のがんぎにまるとぼしび一艘付て居やす。所へこつちからおどり狂ッて行。ろこで又見物のうちへ樂屋から二三人まトッて始終程よくからかいまがら。ついで歩行。馬のくつか何か。おれにぶつたるやつだ。そうするとおれが又其くつをきげ返へすと。暇公が武士のこしらひで。見物してゐる顔へ。ばんと當ると。野夫よわつくなッて。すいさんとう茶山花どの。きつとなッてかゝる。こつちの茶よしてげらく笑て居る。こらへ兼てすらりひッこぬいて切てかゝる。爰で少立廻りを付てもいゝが。どいあしらひかねてがんぎへ逃下る。つゝひて追て来る。追結られて見物どもへ手に汗を握ふせ。あいやと見る間に彼の小屋形船へ。ひかりと飛乗る。侍も同トくとひとむと。船をのいと押出す。其とたんよおれへ又家根へ逃上り。真中おろへあやんとたつと。爰が山だ。引拔て上の綴がばらりとおちる。手拭をひよいと取ッて後へ投ると系毛のみだ

して。保名の物やるひとふこしらへだが。なんと初手がきたなくッて。ぐツときれい事になると云もんだくら。だんどりのびツくりだらう。一首の。ヤッぱりその首が。一それもぐツと引拔よ一てすげかへるのだらう。野名「エ、やかましいわ。そこで船の簾をぐるくと巻と。唄三線はやしまでチヤンと並んで居る。大鼓も。ヤア〜とかけると。(唄)「いざさらば有し雲井の花の袖思へばかゝる執着の」と阿公の鼓唄で。仲藏の狂乱を丸で一番やる積りだ。へん兼て手煉の扇が山だ。左「む、いゝわへ。こらつア一番入るだらう。なアおは公。一む、。本讀でいなか〜おつりきたが。どうも安心ならねへもんだ。野名「エ、おらてくれへ。べらばらめへ心得のねへ事をするものか。へんちよとした所を一番見るが宜。ぶぶ公その扇を取てくんあ。まづ。ちやん〜とひらく。エ、こんなぐわさ〜扇もア出来ねへ。もうちツとまきまツたのハねハウ。左「そろく。道具をらみかはトまツた。オイ暇公。そこの袋戸をあけると封のさらねへのが有る筈だ。一本出してやらッし。眼七「おい来たそれあげるぞ。野名「おツと妙々。まづぶらうを

切てそこぞ。ちやちや。イヤ是ア又さッぱりひらかねへ。あんまりままり過た扇だ。左二
 エ、よく七めんぼう事半りらふぞ。まづ両方の手であげさッし。それからが見所だ
 野呂「そんならまづちやん。よし。の。それ。それ。アよんや。ほい。是はまたり。どん。落せ
 ばひらふ。」「ある程かんーんだ。そう思ひさッて。いおとせねへものだ。野呂「なに。是は父
 しまやらねへからだ。ちッと手馴てくると大丈夫だ。其證據よのきせるあんぞの始終
 かれてゐるから。百發百中まらげへあした。あれ。それ。く。ぐる。く。く。あアよい
 卒「ちんや。く。く。奇妙。く。く。い。や。扇よりさせるよするが。狂乱の所作させ
 るの手。い。げ。左二「扇の落したら落しッきりよまて穴のあかねへやうよおたついても
 仕舞が。丸で所作を久まくやらねへから。ちッともうおけねへのでいねへか。野呂「あま
 く。そりやア大丈夫だ。どん。い。や。それが不丈夫だよ。野呂「そんなら。ちよッと當て見て
 くん。あは公。たち方がまッかりだと思ッて吞れて。とッちめへせ。左二「大相な事半り
 いふから猶安心ならねへ。時よからア左の指の此通り。右の手ッ首のひッくじく。今夜

ハ逆も弾ねへ。眼公裏のおだるさんをちよッと頼んで來さッし。眼七「あ、地弾がたばで
 いらぼけて猶うごき得めへ。左次「うごけすい。つう今の内が。押出して。連中
 のはぢだ。野呂「へん。びッくりまようと思ッて。眼公はやく連て來ねへか。いけ。埒の明ね
 へ。而して左二さん蠅蠅を二三挺氣めへを見せねへ。どうも行燈の火で。うつりのわ
 りいもんだ。左次「いや。や。すままじいけんまくだぞ。今眼公がけへると獨臺と出させ
 よう。さア。く。笹湯がすままでの氣まかせよするがい。卒「あんまり甘口にするか
 ふぎけるのだ。今におだるさんがくるとだッとして寐んねまようどぬかすたらう。野呂「
 何もさう口ぎたないふ事アあるめへまづ今度の狂言でいおれが巻軸だせ。卒「かんぞ
 くだか。亂らくだかえらねへが。おだるさん。だッこさせるものか。野呂「い、わさ。此男
 もそんねへ。氣をもむ譯もねへ。先で承知ならだッこでもなんでも好よさせるがい。
 ぞやアねへか。野呂「へん。女めづらしそうにがや。く。そう。い。事。ほんに素人衆いな
 せめん。なよびく付賦サ。我輩等ア。あのくれへな」といふ所へ裏口方。おだる「左次郎さん



花
 中
 今
 残
 花
 子
 子
 子



何御用だい。野呂「女ばきやアべいるまやのう。」「何だ〜。あのくれへな。女ばきやアべいるしやの。どつ何のこつた」のろ松の少赤面して卒八まよらめる。「なせそんねへよにらめるのだ。左次」「エ、〜。や、ま、〜。いやつらだぞ。さア〜。おだるさん愛へ來給へ〜。時よん所ろねへ譯でもとつとおめへの三並をといふ存心だ。おだる「は安いは用だけれど。おまへなせお弾かない。左所が此通りの手だ。おだる「おやく〜。どうなさつたへ。けしからねへ。あは「どん公なんやが。あの手を持てると安樂だの。どん「あ、おらア。あの手があれび芝居へ出てぶッ付二枚目。また腹が有るから拵物のよ。〜。あくる年のたて三味線おかしらだア。あは「なよそう。うまくいいかねへ。あの膏藥をばがさすよ置て。どん「而してどうする。あは「荒打の足場からおちまして難澁いたしめす御遺錢。〜。め、〜。蛇籠〜。〜。なんでもわりい事といふとおれになすりつけやアがる。いめへましい。卒「そりやアい、が。どん「何い、事が有ものり。だる「おほ、〜。〜。是が敵討の發たんよなりそうだねへ。眼七「さあ〜。坊もペン〜。を弾よ來ま

した。だる「おやく〜。連ておいでだ又邪アをしてのいけな。左「い、わな〜。さア坊こ、へさな。よくねむがらねへのう。だる「なよ。雷張でなりましたよ。野呂「おやく〜。よくとつてるのう。おらアも〜。こんな子を見るとまことよ。へんな心持よなッてふいでくるせ。だる「おや子供いさらひかねへ。野呂「なアお共くせすきだけれど。まづい子だが此子の元だてが。どういふ譯で出來たえらんと。深くかんげへて見るぞ。もう〜。たちされなくなるの。おだる「おほ、〜。いやな野呂さんだよ。眼「この子をや。柏戸がひどくほしがったッけ。左「は、ア始終つよくあらうといふ見所があるぞ。見へる。眼七「なア角力する氣だね。左「どうするぞ。眼「尿をたれずの根付よ。たいとツてよ。左次「あ、〜。やかましい口だぞ。おか〜。もねへ。時よおだるさん。ちよッど狂亂を一番弾てやツてくんねへ。だる「なせへ。左次「がういふ譯だ。ちよんとした茶番が有りやす。所で野呂公が「一番所作らうといふ存心だ。なんとおそそしひたくらみだらう。だる「おやく〜。それいよからうねへ。左「わんまりよさそうでもねへのよ。

底で今夜下見分をまよらうといふりくつた。いや斯きやう。連も長い事なほたいくつだ
 からまづ鼓吹から(定家かづら)をすらすとやツツ(いたいけさかり)と来たら。又すツと
 扱して(ふと)にじことを聞からにひよく連理のちぎりさ(といふ所へ飛であんまり
 扇く)といふりら虫押へに(色に)出(こ)やアホーくく(ちりから)ハアはア(我がう
 らみ)といふ所で扇をばつとひらひて「つ。ぎツくやツツてもうなツツし」(成程そ
 れが)い。く。あおね(事)いらんもんぞ。野「そんならうらうらよ」(火)「そこでひととで
 せうも淋しそらだから(干草も冬枯て)からい奴をふり出して。所作だてとやらかすが
 よからう。花やかでい。せ。こりやア。く。第一ひとりでの短所が隠せね」(野
 「勿論養のねへ積りだかの」(所)が居酒の吸魚といふ所作で身ごころの。ちツと斗りだ
 らう。左「やかましんく。そこで二人の奴だれにまよう」(眼)「こりやア。こざれいなも
 のでなければなるめ。まづ自己と。もう一人のから見た處がと。扱く見ぐるしひ首
 斗りだ。こりやア。こも首あらむをての八つ時でも管秀齋の「つぷりに」受とま

ねへから。たゞ小氣轉のきいたのならまづおれたが。左「いや。きいてのゐるだらうが何
 分ぞう。またくまたからだでいけね。まづ卒公と眼印がよからう。なア野呂公
 「うらよ。とてもおれの氣に入た者ものなし。仕方かね」(眼)「はい。く。ね氣に
 いらすまひがゆふせうなすツてたつかひ下さりまし。左「う。うらふツばい事を
 いはずと。まア二人で立廻りでも案じさツし。そこでこツちの二階にまよう。爰でおど
 ッたら又口がやかましからう。おれが見といければい。卒公と眼公斗り來さツし。見
 物にまじッて居る侍のあが公がよからう。あほまたおれが侍かナロツ兎角よくまれ役だ
 な。左「うらだけれ。仕舞のおらへ来て船へびよいと飛込む其形で。鼓吹と來ると奇妙
 だせ。雖然ちツとでも立廻りの味で。船へ飛込んだら恩が切てさうらねへせ。左
 「うりやアいさをつく内の大小でかけりを小長く打て居たら。ゆるりと思いつけるだ
 らう。あほ「い。く。く。さうかこうかやツけべい。出目公も一口やツてくれるだらま
 折角の頼だけれ。此節はなは都合がわりいから。氣の毒だが半口と思ツてくれね

へ「左」じいん。ろくな洒落へ出ねへ。いなきでもねへ。つご州と野呂公が所作ッて居ら
ち。のろ公替りよ。あぶ公とちよと似た立廻りをつけて見てくだッし。さアおだるさ
ん。こッちの二階とあやう。坊の寝たらそッと巨燵へころびて置がいの。卒八。眼七。
さア〜野呂公何をきて居るよ。野呂「〜ちよッ」と一口げん氣を付けて左「久じひもんだ。
いちのきたねへ。今度の催しに人又氣をもませる事かね。自分の茶番やアねへ
か。野呂「おッ」と承知〜。さア行やせう。頭武公立廻りを美味く頼だせ。つご「べん。だまッ
て行ッし。箸を持って喰ばかりにこせへて渡さマ。野呂「〜とい〜」。善好さん宜しくおたのみ
すやア」どのろ松の二階へゆく。野呂「わが公何でもッぱり拵へて。びッくりさせよう
せ。あは〜」。そしておれが役廻りの此たて手ぐだらう。所作よりたてでぶッ
くれベシ。おもくれへ〜。おまづ電ッと筋を立てねへ。それから小枝のおれがふりを付
よう。野呂「よめら〜」。兎角たての氣どりが。かんぞんだせ。ぞん「ちげねへ。まかし
氣どりよりの葉どりが下手だと音がわたりよ。さうも素切ら〜。さうもさく山を入

て。あは〜。い〜。わかッたよ。随分洒落るもい。が。あんまりかんで合められるから
うるせへ。所でまア立て見よう。さうも素人細工での胸でこせへて。ちよいとおッ建
と云譯にいかねへ。なんでも最初から立て。押合て見るが。一ばん早いよ。そこから
人で手續をおぼへて下ッし。さア頭武公。野呂「おッ」とそれ来た。先胸倉へ来るか。あは
〜。あかじ。てんから胸倉でもあめめへ。かうだから。さア向へづか〜と行きな。
「あら。びか〜」。口でさ〜とさ〜。野呂「それでもほんどうよ。づか〜とゆんだ
壁で鼻づちをおづからよ。只づかと斗でせへ。さう此くれへだ。野呂「よく言葉質斗り取
るぞ。それ帯へ手を掛て引戻さ。野呂「それで鼻血のなんのがれた。あは「これさ。あや
れて居てい。か。而してさう跡をせすと。た〜腰を少しこたへるおもいさを仕
はッしな。野呂「おッ」と斯か。野呂「わ。いやな尻付をするぞ。あは「何も。さう尻とぶらぶら
〜。あは「それでもこたへる氣をさ〜とさあからよ。野呂「さう尻をぶッて。さうもりさ
のさこら入るふうだ。あは「うんねへよ。び〜と云ふに及ぶめへ。野呂「堪忍なねへ。さうも

乗がくると。つい「なんの乗所か。また立ッた斗だ。それ腰の手だ。拂られた左りの手を肩へかけて引。今度ハッとして引かへされ。心持ですこしあるだ。」斯か「まあ、ううよ。ここで。む、そこで胸倉だ。その後あら斯う取り。とりながらさり、引廻す。こッちへむく。そこで両手で拜打よ。胸倉をうちおとすだ。」かうよ。「む、それより、かう手をかけて。ヤかうねぢるとぢさはなれらア。」「あ、ハ、ハ、ハ、此べらばア。ほんとよ力を出さやがる。はなすめへと思へ。こッちハ又斯う取るわ。」「うう取てもかまふものか。ヤッぱり。こッちハ。ヤかうして。」「ハ、ハ。其くれへな事で放すものか。」「はあはあ。又かうやッて。ヤはな。」「爪をたッてもいたメねへぞ。」「そんならげんこで。うれ〜」「どうしてかみなりが鳴てもはなさねへぞ。」とたがひに金ぶら力を出して。いぞみあふ左二郎の何心なく小用に下り此体を見て。「此手合の何をまてゐるのだ。あハ公どうするのだ。」「あハ、あハ、あハ、うう。これさ。い、かげんよとぢぐるのね。か。ばか〜。ううして立廻りの出来たか。」「ううの

立廻りがあの通りだ。」「いやあの通ぢやアねへ。足下も又見てゐる事もねへ。てん〜に些身よまみさッし。」「どうだけれど。たてを付るよとりさへ人もいるめへと思ッて見てゐた。」「これ。あハ公も。まアはなさねへか。」「おれもはなす氣だぜ。放したらむしり付らうだからめッたよハはなせね。」「いやはや。あきれまッたもんだ。これさ頭武公。かやく〜まッかになッてら。い、へらばうだ。」「あんまりはなれずを。水でもぶッかけようか。」「どうだ。さアあやまッたか。」「胸倉をとられてはあすことも出来ねへくせよ。あやまッたりもあらしい。」「あやまらさハ。」「あ。い、かげんよあねへかといふよ。呑公笑ッてゐずと来てひッばなして下ッし。」とよう〜引わける。なるほどはや。つまらねへ所であるいぢのはッたやつらだ。おやく〜頭武公ハ二つの鼻の穴での息がまたりねへやぢだ。弱い男だ。「ほん氣よなれを。ちさひッばなすけれど。」「なんの本氣よならずとものことよ。」「あやく〜。これ見てくん。手をばらぎよされたアあ、痛〜。」「それまで我慢して居ることもねへ。馬鹿〜。い。あんま

り頭武公のけんまくがふろしくなつたから。だんだん氣味がわるくなつて放せなかつた。頭武公もまたあんだらう。そして少し登たやうだッけ。「なまあつくもならねへが。」口もあかかつたとうで天窓から湯氣が立つ。「はなさねへで、男がたゝねへ様な心持よあつたからよ。あゝ思がはつむい。呑公湯でも水でもくれねへか。氣のきかねへ後見だ。」へん。腕の捻くらは後見も。さるぼりも。いるものか。「なんどぶぞけッこなしとして。こせへてくれねへか。野呂公の中々出来るせ。それともそつちで出来そうもあくば。たのむめへ。」へん。是あきの立廻りも。できるも出来ねへも。いるものかな。頭武公。「さう口。せんとさゝいの内証事。おかまひあくとまづい。二階へ。」とつちも尻ッびりのくせよ。口斗りわる達者だ。」といふ處へ二階より。「かゝ。左二さんく。ちよッと来てくれねへ。稻荷町に何をきてゐるのだ。さつちのせうでもいゝわな。こつちがうんぞんだ。」「なんだと。おうせへ安く取あつかふな。これ金箱のついた。」「さゝく。あせわのやけらやつらだ。そこで衣裳だが翌日での

間よ合ねへど。つぎらねへ。上の引拔衣裳のこつちで袷を一枚引ッばとひて。こせへせへあるめへ。それの翌日でもいゝが下の狂亂の形の今夜かりて置がよからう。出目公今度の隠居役に。一ッぱしりいッて来てくだッし先で寐ていかねへせ。」おらく。いッて来へいこつちから来たといッたら。よこすだらうの。「注文さへわかると小僧に脊負わせてよこすよ。」また二階より。「左二さんく。早く来てくれねへか。もうすこしでまごまる處だ。」「はいく。今ゆくよ。そんなら出目公頼んだよ。あば公も頭武州も車輪でやらッよ。」といゝすて二階へうけ上る出目介もそんなれう屋へ出ゆく。「さアやるへい。むゝやるへい。いゝが。頭武公たてのちよい。と手先をさる。斗りで行てへもんだ。どうも足下のやうよむやみと腕をひッ掴んでひッばらッたりしてもあんまり素人ハサ。相手になるものが怪我をする。そして大相あ瓜のはへやうだぞ。ナニ七種のま、だぞ。まゝむせへ。」いゝ。わさ。うれたとッて夜る夜中瓜も取れねへ。其心持であめへのほうで氣を付けてくれねへ。」へん。熊と角力を取のまめ



かぞいりた
 雨のゆわ
 いらん
 ちよん
 まさの
 川風

へし「さきよ斯う手と付て野呂を一番よわらせてやりて」
 一方は「さきよ斯う手と付て野呂を一番よわらせてやりて」
 が當ると。ママ爰へ来さッし。後ろ合せようれ。かういふ身よ首がぶッちげへよなるだ
 らう。あは「むい、むい」うしろへ手を出して。おれがあらへ、両手を掛てぐらと。前へこ
 ゝむはづみよ。おれがひよいと足を上て。後返りとして向ひ合ふと、さきよ手だ。あは「むい。
 こりやよかうら。まかしろう美味くゆくか。おれがすれが、が野呂松よのおは
 つかねへ。ろこであらつと、ちめてやりて。あは「むい、むい」わく。どれ一つやッて見
 よう。ママうれ。かう背中が當つた。それ手を上げておれがあらへ。さうだ。そ
 れ。ひよい。あらわりい。うらうとんまぢやアいかねへ。双方とたんよはづんでよ。あは「よ
 し〜。そんならあらへ手のかゝるを相圖よ。ぐッてやるぜ。思ひきッてやらせし。
 あぶなくもあらんともね。あは「がッてんだ。がッてんだ。これ背中が當つた。あは「ママ
 わアよいさど力まかせに背負上る。頭武六もはねかへるはばみよかけあんどうをけ

かとしながら。あは太郎が前へ地ひきさせてどッさりたおれる。巨たつよ無入のし
 子。この音よかどろきわッせ泣出す。あは「やア〜大へん〜。お、方こんな事だら
 うと思つた。あは「どうしてあのあんどんが落たらう。おい〜二階からあかりを持て来
 てくれねへか。いけねへ〜このさわざもあみな〜のすき見れば下りまッくらや
 み卒八は二味せんを取。わるいかん所にてち、ハハハ、ハハハ、ばせん」
 古い〜。そんなことより早く明りをやらッし。そしてもうこッちのたいてへ筋ハ
 通つたり。跡は翌日の事とさよう。みんなが下へあゆみねへ。かたるさん早く行な坊
 がどうかまたそうだと。燭臺をもちみあ〜ひりてくる。あは「どうまたのだ。またどち
 ぐるツたらう。久〜ひもんだ。あは「あや〜。あぶらだらけだ。こりやア大へんな始末だ。
 るれ〜左二さんろこ油だよ。エ、裾を引なねへか。は〜。いやいや。不始
 末斗りするよ。こまるぞ。ママ坊をおこ〜てやらう。あ、い、い、い。かんよまなく〜。
 馬鹿おまいどもよ。こまるのう。ママ〜こりやア素人での直りをうもねへ。あッか

アへ連れて行がよからう。ろしておだもさんもあるまりおろくあつたらう。眼公おくッ
 て行ッし。だる。「なアよ。こッちに居て。めんたる事やアないよ。」眼「こッちの内をば。
 よく〜見てびツくりしてゐると見へるの。あ、あ。かうも武運よつきはてたか。ちエ
 、、、、」左「これさ。むだッ口をた、かすと。早く坊を連れて行ッし。おだるさん大よ。ろん
 ちらあした又ちよいとやッておくれ。さやうなら。おし〜のはやくまらりませうね
 へ」野「タツと早く四時超だよ。だる。おほ、、、、。はいとあたるお、やかましら」
 おだるハ早く〜へりゆく。二「ぼろハ怪我でもまへまねへか。何よッぼとはなれて居た
 から怪我のちねへ。驚くりきたのだト」卒「いや。坊ハ頭武公がどうかえさせ。おハ頭武
 公〜。何。何だ。なにといふかさッぱりわからねへ」野「ほんにわからねへ事をいふ
 ハ。中氣よでもなりハまねへか」卒「あれ。かむりをふらア。中氣でハねへよ」左「どれ蠟燭
 をもって来さッし。あ、口をどうかあたのか。あ、む〜。わかッた〜。あおをひッかつ
 いでほうと出したから。舌でもくッたらう」香「あ〜。そうだ〜。たてよかむりをふら

ア。わハ、、、、。こいつアおかし。野「ろんなら寒の紅がい〜はやく。付
 けてやらッし。内よハねへか」左「どんな頭取でも。寒の紅までハわたすめへ。馬鹿〜
 しい役者だ。あ、ば、紅ぐらゐでハ直るめへ。なんぞ薬をカッてこよう」香「あしたの花見ハ
 喰事が出來ねへでい、氣味だなア」野「そしておまやべりも出來ず。あ、かわひさうだ
 な。是がほんの舌喰みトめといふのだ。あ、ば、公だとい〜まやれがあるけれど。女郎の
 誠と。トいふ支關付で」大次「もうい、ハ。あ、ひつこい。それ怪我人が何かおかしな手付
 をするせなんか書くまねをすらア。硯とふでをよこせといふのだ。何か遠おんでもす
 るのだらう」野「これ筆。これ紙。おんだと。こッちハまらねへところでハねへ。舌。喰て
 こてへられねへ。ニ、やッぱりまやれやアがるアハ、、、、。くるしきづぶ六が
 〇〇〇。まやれよて大わふひとあり。づぶ六よくすりあど付々させ。みな〜も茶ばんをふく
 みてやすみける

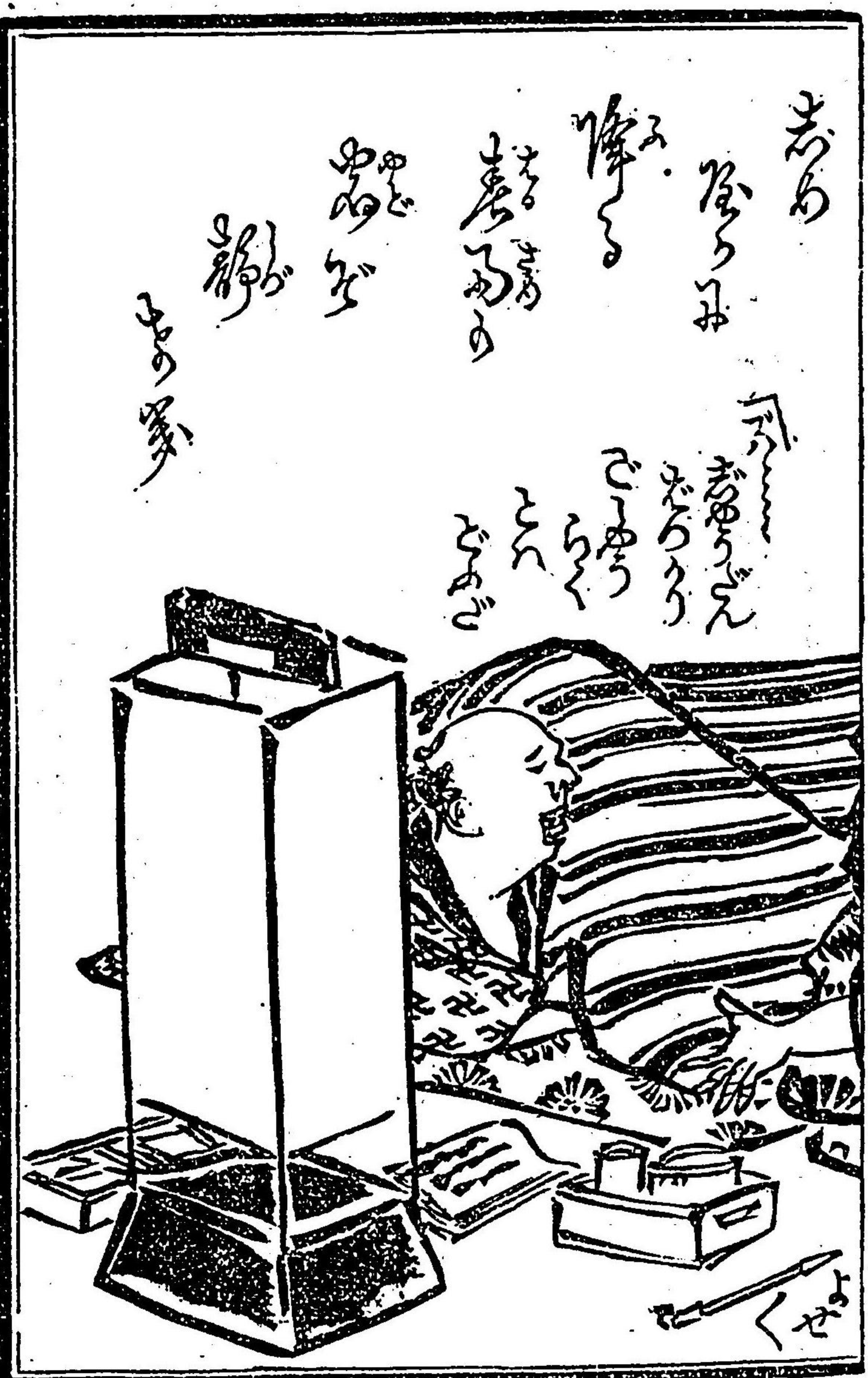
花暦八笑人

第貳編卷の下

江戸 瀧亭鯉丈子著
東京 深川梅園翁閱

夢ばかりなるを詠じたる春の夜のみじくきも。悠人の常腕をかばへず。夜に日を繼で
 高射明ばなしたる引窓より。光々たる日ざしに有明くらく。晝豆腐の聲まくらにひ
 き。眼七の漸やく目をさまし。枕元のさせるにて。あげらしたる煙草へをかきよせ。
 尻から煙の出るはどたばこも呑。灰吹のこぼれる程唾をはきため。少し人心付りにや
 眼「さア〜。おそいぜ〜。起たり〜」卒八「眼公一ぶく付て下ッ。さッぱり目がさ
 めね〜。眼公の早起斗りよやア。おんなんだよ。さア〜今日ハ大事の日だ。みんなが
 起たり〜」左次「まだあんまり早からう。あ、やかましいやつらだぞ。チイそこから一
 腹吸付て下ッし。どうも目が明ね〜」卒「おに。うッちやつて置ても。おのじと明もんだ。
 それたばこ。エ、もうちツと手を延したり」左「チット來〜。あ、もツと手をのばさッ
 卒「無理な事斗り云ふぞ。積候ぢやアあるめ〜」。もう是で右の手ひが。おめへも

最ちツと「といふうち雁首をかかさに持。ふりまはず故ふさがらぬけてあを向に兼て
 居し。吞七がひたいへぼったりとち。ころ〜と鼻のわき〜ころげると。うっ〜心よ
 手を出してた、きつふせば。顔中火だらけとあり。びっくりしてとび起る「あ、〜
 なんだ〜。どうする〜。あ、眼の中へ何か這入た。こりや。たまらね〜。あ、いてへ。
 お、〜、熱い」左「あ、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、
 水でせへ。驚くそうだに。ねがはよ火でいたまらね〜等だ。あ、〜、〜、〜、〜、
 やまのちのこうみやう。今朝斗りの床ばなれがよりツ。こきみよく飛起た。あ、〜、
 〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、〜、
 のさわぎで目をさましたものを。どうして知るものか。野呂松か。可愛ううに。び
 ッくり〜いびきの虫のおどろひたりら。胸をさすッて居る處だ「いや〜。卒八だ
 なく〜。此べらばうめへ。今まで口をさいて此せんぎにか、ッてから。いびきをかきア
 がる。これ。なせあんないたづらをえた。卒「あ、〜。あやまつた〜。わざとえたので



ねへ。鹿相く。野郎と鹿相だと言てまかみ火鉢と間違ひ。卒「そバからあん事といふか
 らいけねへ。」「いや有りやういおれが吸付て貰うと言て。つい火鉢のら扱たのだよ。わ
 る氣でいねへから堪忍してやらッ。」「む、そるか。そんなう了簡してつかりそう。そ
 う事がわかればいい。まかし事は分つたが顔のやッぱり悪い。」「さうのうへ厚くなつた
 ら。面だか。かゝとだか。知終めへなア。」「いや面の皮が厚いといへば石屋の夜砂ぶし。
 の。」「やしやぶしといなんだ。」「それ菊石屋のサ。」「うん。あれか。おかしな名だのう
 呑「あのつらを見ねへ。紺屋で遣ふやしやぶしのやうだせ。あバ公より菊石もつよか
 う。おまけに所々玉子とじが有て。けんばのおかけで鼻の穴の。ちツと斗りたすかつた
 が。土唇と。はなの先と。とぢ付てゐて。なんでも犀角と角兵衛獅とで。半身上ふるッ
 たと云面で。」「面のいゝとて。大概よしさッし。おれがつらまで引びとよならべ立
 て。ハンおもしろくもねへ。そして其面が。イヤ。つらさやアねへ。其息子がどうしたと
 いふのだ。」「イヤその野郎が。つらよも似合ねへやつし形で。馬鹿よのろいやつよ。丸

であバ公サ。横町の文字焼といふ豊後の師匠よ。ひでくのろけておれに取持てくれる
 といふ譚だらう。所でおれが事だら何でも四文と香込やした。なれども男のわりいが。
 あバ公と違ッて金満と云もんごから。ひよッとよく喜んで出来ようかと。」「これ。萬
 事わバ公く。と。あんまり安ッぱく引だすな。」「アハハハハ、
 、、。うりやア、が。あば。」「む、ん。よくねへ。」「その事やアねへ。呑公其一
 件のおもむれへせ。思入れあをり付ておぼらせてやらうじやアねへか。」「そこで聞ね
 へ。おれも其氣だから文字焼が所へづつと考かけの所がついぞ行もまねへうちだから。
 なんだか。わるそうなものだが。そうでねへ。卒「そりやア其筈だア。お袋が古狸に娘が
 九尾の狐だものを。」「狐でもぬ、ラツちやッて置つし。」「それから行て。どうしたよ
 どん「そこでお袋めがい、搦梅に。呑さんおめんがさい。ちよッと湯へ這入てまわりま
 すから。御ゆるりとおあろび。とせツと出て行。あどの差向となつたから。是ぞ天のあ
 たへと段く。断をたぐりよせて來た所がとんだ請がい、から。彼の事をい、出すと。

かや。あの。おしやぶしとやらのことかへ。私わたし又またどいつてにっこり笑わらつてゐるから。早はやへ所ところがおめへると思おもつたと思おもふ様ようにおつうなッて来きから。たれから又またどうする氣きだと云いど。おまはんならどうも。はッと顔かほを赤あかくまたから。さすがのおれも顔かほが少すくしばか〜と去さてきた處ところを手てで撫なると吹ふ売うを叩たたき潰つぶしたのだ物を。びっくり去さめへ事ことか腹はらが立ためへ事ことか野「これ。今いままでの夢ゆめのはなにか。へんべらぼうめへ。人ひとよやアまじめにあいさつをさせやアがッて。いめへまし。〜いや。ゆめどし思おもいれねへ。あんまり残りのこりおしい左「こつちのまた實際じっせんどし思おもいれねへ。ゆめならばすいぶんありそ。うな事ことだ。あかしあんまりたわひのねへ。ことを。馬鹿ばか長ながくひッばつたもんだ。おもしろもねへあ「ろろさ。うれに去さてのなんとい、天氣てんきさやアねへか野「さればさ。是程それほど日ひ和や夕ゆべ頭づ武ぶ公こうが舌したを喰くふといふもふしき。この出「そりやア舌したを喰く等らだ。今年ことしの江えの島しまに開帳かいちやうがあるものま辛「だうりで犬いぬがどうばへをすと思おもつた左「これ。てへげへよして湯ゆまでも行いつてこれへか。朝あさッばらから。馬鹿ばかな言ことばかり云いつてらア眼「湯ゆへ遣は入い

たとッて金時きんときよかなふものか野「我輩わがら寐ねちやア居ゐねへ左「寐ねて居ゐながら寐ねて居ゐねへと野「イヤサ我輩わがら枕まくらを擔かつて布ふ圍いを脊せ負おつて壁か打たたきの上うへ横よこよひよりりと立たつて居ゐる迹あとの事ことだ左「エ、い、かげんよあねへ。いや。どいつも〜床とこ放はなれのわりい事ことだ。夜着よぎを脊せ負おつて起たかハツたぞまお「菰ももが蒲か鮮せん小屋こやにゐるやうだア「吞と七しちの哥うた右衛門えもんのこわい。ろにてぞん「葵あひ下くだ坂さか二につ嗣つぎ。ばたり左「どう去さて。そり味あじくの見みえねへ。伊賀越いげえの盤ばん若わ坂さかで去さてゐらア。さア〜みんな一つ所ところで巢す立ただ〜。やれ〜ふびん〜や。今朝けさの頭づ武ぶ州しゅうちうの音ねも出でねへあ。舌したのどうだ。ちッとい、か。あかしひとづ、口くちのへるもよからうづ「そり〜。ろの位くらいなこの。手てがゆいもんだぞん「アハ、〜、〜、〜、〜、〜だ。あどけなくッて〜。よッばさおもしれへ〜づ「あんまい。おもちよくもねへ。まあッて〜。アハ、〜、〜、〜、〜、〜有あがて〜づ「なんの。あらかて〜。このがあゆもんか。なんでも人のわい、事ことといふと。うあひがやあがゆ出「〜、さ〜。坊ぼのい、子こだよ。かんに去さる左「いや。ろれのさてあま。さんと〜三日さんじつ飯いひをくのねへやうな心こころ持もた

が。腹直しよ今朝の雑煮とちようでいねへか。眼「よからう〜。ろくよ飯といふものを
 くのねへので。冷飯がどんとあるからてうとい。眼「さめう〜。眼公早くやらッし
 眼「やらッしも能出来たア。おれにこせへさせてくらふ氣か押がつよい。香公やッて下
 ッし。眼「〜。こッちの座頭かぶだア。平日の兎も角も今日の大切な身分だ。あバ公や
 らッし。此方逆も其通りだて。唄ど。たて敵兼帯でおさる。眼「さいつも〜皆たか
 ぶッて居るからいけるもんぞやアねへ。そんなら拳でやるがい。眼「よからう〜。
 狐で行へい。みんな一所がい。壹人勝ひとり負の扱て。残った者を三助とまよう。ま
 かしひとりでいだれにきてもあんまり可愛ううだから。三助役を二人こせへよう。卒
 よし〜。さア三打だせ。夫きた。まやん〜。おや左二さんな世見てゐる。左「なん
 の。おれいせずとい。此家の主だものを。何〜あるじでも無い痔でも用捨いねへ。
 ひッ遣ふ〜。眼「〜。かげまの夜鷹おやアあるめへし。眼「あんまり。あるト〜と内
 びらをきると居ゆに。居てやらねへからい。眼「さア手を上〜。左「あさけねへや

つらだなア。よし〜。さアこい。あよ〜。よんやま。まて〜。やア〜。卒八眼七が
 鉄砲であどののこら名主。やア奇妙〜。御苦勞ながら。ふた六助さん。早く頼
 よ。卒「さア〜こッちのお風呂へ召てこよう。なア香公。みんながいッてくるうち。
 こせへておかッし。壹人の爰へ来てお床をあげろよ。〜い。心持だ。是よりみな
 くすてせりるにて。楊枝をく〜湯も出て行。跡ハ卒八。がん七。さしむかひめて。眼
 いめ〜。いめ〜逢ふなア。卒「これ見さッし。床もあげずにゆきやアがッた。小言だ
 ら〜。手水を遣ひ。卒八の床をあけてさうじをする。がん七の〜。ハッついをたき付る。眼
 かけへ氣を。もゑねへ榎木だぞ。づぶ生木だううて煙ッて斗り居るハ。なんと味噌をす
 るもめんどうだ。ら。醬油で水さふするとやらかそら。菜も少しある。卒「猶奇妙だ
 わッさりしてい。もんだ。それもわりいといふやつ〜。いせねへ斗りだ。眼「ちげへね
 へ。そこで鯉節を澤山かいて下ッ。またぢの此位でよからうの。卒「さ。れ。もうちツと
 たんどでもい。雑水はうすひのがい。ヨットよからう〜。眼「いやもう。此まきに

へこまるぞ。又いぶりだしたの。此又火吹竹のなんだらう。さッぱり役また、ねへ。大
 家様と違て吹竹の尻の穴のなりたけ細小がい、もんだ。チ、いぶるぞ。一菜をさ
 るべい。イヤこりやア洗ッて有るのう。よし。あッあ。手あぶさげたり水仕業。あッ
 浮世じやアなア。此うしろのかつあ合方へ礎を入れて貰ひてへ。眼「このうしろなら
 惣雪隠が有斗だ。それよまても大相いぶることだぞ。もう飯を入れてもよからう。ヲ、
 いぶい」どかほをさかめながら。なべぶたをとり。めしを入れてかきまひ。眼「卒公。此く
 れへな。ゆるさでよからうか。卒「む、よからう。あ、それ。水ッ鼻ゲ。あ、あぶ
 ねへ。眼七のす、りふめども。問よあひす。ぼたり。と二重ほど鍋の中へ落す。卒
 「やア大へん。事こわしをやったぜ。おれもす、ったけれど。問よ合なかつた。卒
 す、らぞと手のか、とで撫上をばい。に。眼「そうやればよかつたが其期又及んでどう
 も。當意即妙といいうねへもんだ。おれもまだ水ッばなの方の素人だ。エ、どうする物
 か仕方がねへ。見ぬことを消したア。折角こせへて是まきのことを捨られもまねへ。卒「あ

んまり是あきな事もねへせ。ろして見ぬことを消しよもせよ。現在見た己のどうしても。
 きたねへにらげへねへ。眼「あにろの氣で脇の方をくハッし。うッともればい。「わさが
 い、か。中が能か。知れるものか。眼「それもううさの。かういふ時の青ッばなだ。かた
 まッてゐるから。あり家が知れてい、けれど。卒「エ、エあらアくのねへぞ。げッ
 く。眼「そんなねへに。きたながッてくれる事アねへ。頼母まくなへ男だ。ばかなこと
 をいふ。頼母しひの頼母まくなへ。虫がさらふのだから。仕方が
 ねへ。無尽の斷りでも云やアまめへし。眼「それでも飯をみんな入て仕まッ。から茶漬
 どのいかねへせ。卒「どうするものか仕方がねへ。干死ねべとッてそりやアくねへ。眼「
 足下にくのねへもいひが。みんなよの沙汰なしたよ。卒「知れた事よ。うりアや宜が眼公。
 紙を一枚くだッし。お下屋しきへ御幸がある。眼「落としがみな。火ばらのひき出した。卒
 チット有馬山と雪隠へかけこみ。まばらくあッて出てきたり。手水鉢よて手をあらひ
 ながら。卒「チャ爰のうちの手拭かけすだの。眼公ちよッとかしてくだッし。眼「チイ袂よ



有る。うれしな。卒「鍋をかろしたの。何だ又中をのぞいてゐるの」と云ながら眼七の袂へ手を入ると。手をわらひし巾を鍋の中へぼったり。眼「エ、これさ。手水の巾が這入るの。卒八のうろたへ。眼七が袂より古きはな紙と。ともよ手拭を引出し同トくなべの中へはながみぞ落す。眼「やアノ。もうくかあアねく。卒「なんの蓋を取て置くからわりい。中を見て居たどッてはトまらねへ事だのに。段くつををおもくきたア。どうせこつちのくねへ氣だから。かまひのまねへが。眼「それだどッてくひもの、上へ濡手を出すこともねへ。卒「こつちのくひものどの思のねへ。くねへ物だと思たからよ。是が眞の手水のてから水がもつたのだ。眼「いや水ッばなのうちい。おれもくふ氣であつたが。跡二味の調合でぐツと考よくがす、まなくなつた。卒「おまけに鼻紙も三四度御役をつとめたやつだ。ならびに袂くそなをも少く。是を喰へばおうぎなものだ。卒「むかし。幡隨院長兵衛なすの。くつたそうだ。幡隨院長兵衛でも。摺願寺の半兵衛でも。是斗りの喰めへ。わ、げツく。眼「おれもおかしく。びらく。もろく。二人

の喰ツこなしとさめよう。あ、びらく。と二人のひねをわくるまてゐる處へ。みなく湯上りよてかへる。野「あ、く。い、湯であつた。これくお茶をくまねへか。氣のきかねへ三助どもだ。眼「まだ茶が出来るものか。左「なんだ茶も拵へねへのか。ばかくしい。なよをまてゐるのだ。眼「何をしてゐるものか。雑水をこせへてゐたのよ。そうちせよ兩方出来るものか。出「兩はうだどッて別手間のいる事では有めへし。茶釜と兩方火を焚ばい、に。いやもう終ねへどんちきだぞ。眼「夫よ。眞木が生で一處せへいぶッて斗りゐてようく焚たものをい、わさ。ちつとまたッ。ぢきよ湯よと又火をたきつけ。野「いやはや。ぶしまつなことをだろ。ふたいが香せろう氣がひかねへのだ。左「茶の。わくうちまッてゐる。雑水がかたまッて仕舞だらう。まアやつつけよう。其うちすこゝの湯もぬるむだらう。右「そうく。さめてい。いかねへやつだ。あの手ぎわでい。どんなこせへようをまてか。と蓋をとり「やア水雑水とやツふさ。出来た。あは「そらつア。おつふ氣ぞつたわへ。妙く。中へあよか入たか。眼「エ、ハ、ハ、ハ、ハ。中へ

「菜と聞いていながら卒八と顔を見合わせ「菜斗かたッけのう。」「そらう。まア菜斗か
 はやうなものさ。」「あんのさッた。様なものがかかしの。さア〜。眼公。盛山さねへか。
 エ、七めんどうだ。てんでんよ手もりとやれエ。」「あ、妙な塩梅だ。うめへ〜。」「
 かや。あひた。染て。あすいもの。ひと難だ。」「どうだ。みんながうめへか。やれ〜。
 ガキ〜。まはかげんのどうだ。げッ〜。」「何だ人の物を喰ふそばで。げい〜。小
 ぎたねへ男だ。」「げいぐらゐか。きたなくッて〜。よく此さふ水と喰ふ。」「さふす
 むが何で。さたねへものか。眼公も卒公もさせきのねへ。」「いや〜。大きらひだ。人の
 喰ふのを見てもむねがわるい。」「なせ又うのやうよきたかがるのだらう。かかしの
 う。あま〜。こしらふながらみづッ鼻をたらし込で。」「こま〜。だれか見て居た
 様だ。」「卒八が顔をみる。」「これ。ほんとうよ水ッ鼻を落したか。おらアさようだ
 んよいつたら。ちさ白状よおよんだ。やア〜。とんだものをくめさせた。げい〜。」「
 やはや。とんだやつらだ。是れたまらねへ。さア〜。胸のとろるペッ〜。だれた。眼公

「卒八か。」「どッちよあても。きたねへよちげへね。」「げッ。あ〜。たまらねへ〜。」「
 有やういおれがたらしこんだけれど。夫より卒公は又雪隠へ行て。手を洗った。中とた
 らしこんだから。實よきたねへ事よきたねへ。」「やア〜。大へんな事をいふ。だ
 うりで。うららの喰ねへ。さ〜。じひやつらだ。ま。きたねへ。げッ〜。」「聞ば。ま
 くほど胸が。げいッ〜。」「なる程たうりて熱がらとら〜。つてあつな匂ひがす
 ると思ッた。げッ〜。」「ア、ハ、ハ、ハ、ハ。ろの匂ひは眼公が鼻紙の匂ひだ。すさげ
 へしだりらくせへ等だ。」「エ、〜。はなッかみまで入れたか。ろりやア又どうして入れた。
 いや〜。聞め〜。さう〜。なんもいらすよゐてくれる。聞けばさ〜。ほき。げッ。
 胸が。あ〜。げろ〜。」「是よつ〜。ひて惣座中小問物見世よて。大さのぎとなる。この
 うちいろ〜。おかしき思入あれども丁敷かざりあれを。ぐッ。と。おし。ま。ら。く。あ
 ッてよろ〜。あつまり。腹直しの酒よて。みな〜。氣色をなほ〜。」「さア。だれが駒形へ
 行て船を拵へておくがよからう。」「そら〜。まゆんはづれたから。すぐよといふ譯に

の行めへあは「どうよ。役者の外ほか先さきへ行ゆが、。そして船宿ふねやどもその味あじひを知らずでい
 いかねへから。船頭せんとうはすッぱり相圖あひづをのみこませておくが、。さア〜早く行いたり
 く左二「のろ公のろこうは此この袷あはせを裏うらのおむさんの處ところへ持もて。いッて引拔ひきぬのあんばいをよくか
 えて頼たのまッし。そして船ふねに婦こが赤あかくッていつまらねへから。おだるさんを頼たのんで連つれ
 行ゆう。今日けふのふれも假かり成なり又また彈ひけそうだけれど。二挺にていだと直ちい、辛「所作しよさくの方ほうたひがい
 夕ゆふべきまッたから。もう稽古けいこのい〜としてはやく出でかけよう。野の呂ろ「あハ公こうとの立廻たちまわ
 へどうだらう左「いや〜。これのぬきがよからう。なま中陸なかむらで立廻たちまわりらしひ事ことがあッ
 ては。見物けんぶつにかんが付つてゐるからう。「はのたてがもやひよなッていふへのほねを
 ひが。むだよなゆぢア。いめへまひい。ひたをくッても。犬いぬひよだ左「アハ〜、〜、〜、
 ちげへね〜。さア〜船宿ふねやどへ行ゆもの、早く出でねへか。眠公ねこうかだるさんを頼たのんで來き
 さッ〜とそれ〜よ手配てはばいをさだめ。や〜あッて支度しだくと、のひければ。みな〜ぬけ
 く〜に出てゆく。○大江戸おほえの名所なごころ多おほきその中なかに月雪花つきゆきはなの艶景えんけいを。兼備かねびへたる隅田川すみがは。實じつ

よや賑にぎはふ花見月はなみづき。哥人うたびと雅人みやびのいふもなら。親おやの代だいより仕出しだしたる。伊勢いせやの亭主ていしゆ出でぎ
 らひの内田うちだの女房にようぼうかしの嫁よめ。鬼おにの留主るす居ゐる命いのちのせんたく。かせぎ男おとこも操女みさめも。花はなよ
 かる、其人そのひとよ。またうかされて出でる人ひとを群むれつどひたる隅田すみ堤つみ崩くづる、斗はかりの人足ひびろしハ蟻あり
 の往來かうらいよことならず。彼かの催もよほしの人ひとの。かねて期きしたる手分てわりけの通り。あハ太郎たろうの侍さむらい
 のこ〜らへ。吞すす七しち。出でめ助すけ両人りやうにんの後見こうけんの心こころよて。そこ愛あいをぶらついで居ゐる。出出「チイ〜。
 吞公すすこう見みさッし。うつくしい〜。ハ、ア奥様おくさまハかひろひだな。さん「ほんよ。こりやア奇き麗れい
 だ。いや大相たいさうな女中にようちゆうだなア。奥様おくさまの日傘ひかさでかこッてさッぱり見みせねへい。おだいじのもの
 のだが。御無ごむ心しんながらちッて見みせて下くださればい、な。眼眼七「取巻とりまきてゐるの。〜。どれも一粒ひとつぶ
 ありだア。ア、アッり、まひもんだ。なるほど。人ひとハ武士ぶしおせ傾城けいせいよいやがれ。といふ
 川柳せんりゆうがあるけれど。女おんなハ武家方ぶけがたの事ことだ。どうもさッぱりまてい、〜。香香「そのさッぱりとい
 ふやつが。やッぱり。こッちが。さッぱりまねへからの事ことだよ。奥女中おくにようちゆうといふと何なにう不
 自由じゆうらしひから。別べつしてま〜んこうがあるのだ。あ〜どれ〜。中肉ちゆうにくで水澤山みづさわらしい代しろ

物だ眼「そうよ。此このおいたけからの。さぞいだしの出る事だらう。さア〜。あどの方
 ちとむづかしむぜ。こりやア突つこせ買かと損そんをするせ。だい衣落おちが見へて来たきのおや
 り。加賀見山の六段目ぢやアねへがこれ〜。申し尾上様おしあがのいぢわるいお局おつの〜。
 いふ形かたちだなア。虚うそアねへ。忠臣蔵七段目ちゆうしんざうしちだんめで云いやア。由良ゆらさんを取巻とりまく仲居ななどもさ。右
 と左ひだりりで二人ふたりづゝ遣つかふといふ人形にんぎょうだな。アハ、ハ、ハ、ハ、ハ、秋葉あきばがお小休こやすみと見へるわい。
 いや。それゆるうと。あむ公こうのどっちへ行いた眼。今いまみめぐりの茶屋ちやゑに見へたが。野呂松のろまつの
 何所どこをうるついでるだらう。せんてへこ〜。遣つか一所いっ所よ。こようといッたよ。先へ来てま
 った眼。何なにさ。のろ公こうも。あの形かたちで道みちなぶらねるぞ。せつおがッて眼。ろようよ。
 幾草いくくさの通りとほりから。氣違きちがひにされてもつらからう。〜。いや。今日の催ひらじひら。きッとはねるだ
 らる。のろよめへ。うまく察さつじた眼。〜。そうよ。あ。まうし氣きぢげへのうちが。よッば
 どつちひせ。めんまめんま色氣いろけがねへさ眼。〜。どっちしても。無い氣きだから。やけでい。
 いやはんよ此邊こゝよ来てきひあんなまま水邊みづべるだらう。奥様おくさまにひかれて。ついで。うか〜。来た

〜。また〜。早はやい。もう少すこづついでらッたら奥様おくさまに逢あはれる事も有あら眼。何なにの。見た所みが。
 きやまんの船ふねだ。ばか〜。しい。歸かへッてあむ公こうと〜。所で茶ちやでも呑のま〜。又またみめぐりへ
 立たちまあり。あむ太郎たろうが休やすみむる茶屋ちやゑへはいり。〜。いや。是こゝのあむ之進のしんさま。あむらあむらひ
 ひい。呑のまあり。やア〜。出目介でめすけも同道どうだうさま。こりや手前てまへ達たちも花見はなみの〜。へい。左様さやうで
 ります。あまた様さまも花見はなみいふッまありましたか。成程なるほど此節このせうの武ぶさへ。〜。さう〜。はい
 出いしますから御尤ごようでおあります。〜。こりや。わいらあ武ぶ士しを嘲あざわるう致いたしおるあ。〜。エ
 〜。どういたしまして。武士ぶしはちやうらうあいなりませせん。さういいたすと。禪宗ぜんしゆの坊主ぼくしゆ
 などがなるらうでおあります。勿論もちろん昔軍むかしぐんの有あつ時とき分ぶんひやうらうらう遣つかひましたあらうだ
 が。〜。玄げんかし。只今ただいまでもあまたがおまあり遊あそびしてすと。浪々なげなげいなります。が。兎角とくかく
 勢いきほの字じが付つてハむづかしあいあと醫者いしやもすました。〜。いや。こいつらこいつら重々じゆうじゆうの返言へんげん。最早もはや
 聞捨きりすてよならん。と刀やいばへそりをうら。立たわがれば。茶屋ちやゑの婆ばの大きおほきよおどろき。あむ太
 郎たろうを押おへ。〜。さア〜。御了簡ごりやうけんなすッて下くださりまし。これおまへ方かたアとんだ人ひとだ。お侍さむらい

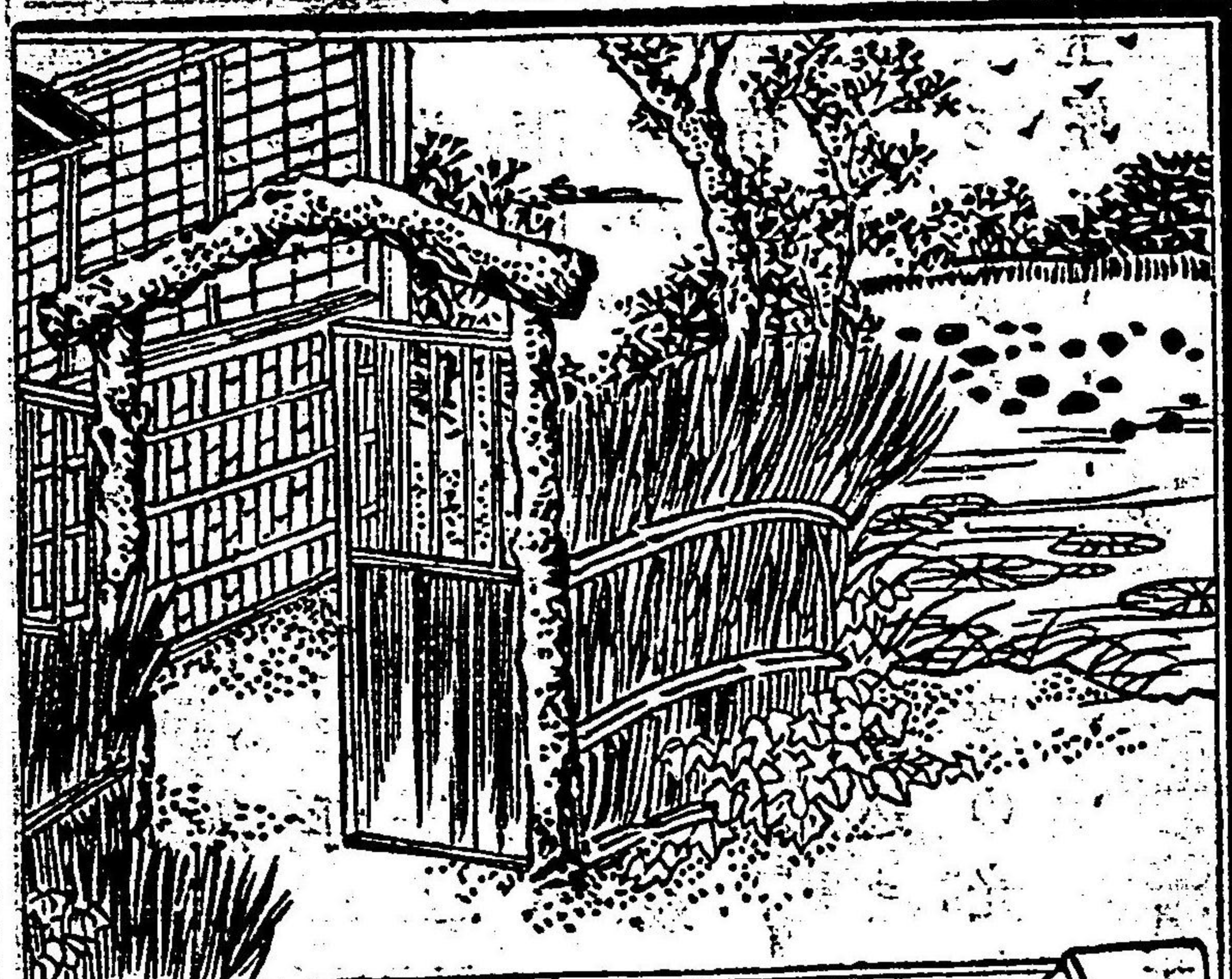
並のいふことだから。やみど。カ味ちらりしてとう／＼まじめに仕通まやアがッた。あ
 っ、っ、っ、っ、っ。まやれがこうトた物狂ひといふめも達だなア。まかし仕組た事よ
 りうまく出来たせ。おらが番又は。かういふすぢに書べし。手軽くツてとんだら。香
 うよ。此くらゐ。ひッかければ澤山だ。是へちよいとした落をつければ喝采だ。あ。あ
 と追出さればな。もあんまりくやしい。船へ行て一陶下げて来て。二人で隣の茶屋へ
 遣入て。ぐい／＼呑であばのやらうに氣をわるくさせてやらうでいね。か「いや／＼。
 そんな事といふと左次さんが又小言だ。それよりママのろまのどをうるついで居る
 だらう。もう出てくればい。はあめてもい。時分だよ。秋葉の方へ行て尋て見よう」
 と二人の秋葉道へ心ざし。境内よ至り見れば。玉垣の邊り大勢人立して。集りゐる。あ。
 もじやと立寄り見れば。このいかに。のろ松の高手小手よいましめられ。そばに侍中間
 付添てゐるを見て。出目「やあ／＼。ひさいめも逢てゐるせ。ぞん」ぞうよ。どういふ理くつ
 かまらねへが。よもや盗人も仕のしめへ。何もあんねへも繩をかけることいねへ。なん

のことだ。折助ももとなぐツて連て行へい。」「どんだ事をいふ。先ハ武家方だア。めッ
 たな事をして。こツちまで天井を見ちやアつまらねへ。體よわるふざなでもまたらう。
 慮外ものあら手打よされても仕方がねへ。あば公の侍とちがふの。まづ譯を聞て見
 よう。と人をわけて。傍へいたり。出「もし。もし。此もの。私共見知りましたも
 のでおざりませんが。どういふ事で此様よまをツて置ので御ざります。侍「貴様達の。此者
 の連か。ぞん。エ。連ぞやでもおざりませんが。一たい亂心致しております故。なんぞか
 りよぐわいでも致したなら。いく重よも御了簡なさツて遣へさりまし。侍「成程。乱心の
 跡やらう。ぞん。左様ござります。面よも似合の色氣違で。侍「成程色氣違ひでも有り。見
 らる。通り御前様のお供先で。御附の女中達へ。すりついたり。追廻たり。いやはや
 以ての外尾籠がまじき狼せきよ及び。すでも切捨よもなるべし所。御前様は御詞が。か
 ッて追はらへども。お言葉よあまへて猶々この邊へ立さわり。甚御遊山のさまたげ
 に相成故。お慈悲を以て此通りまばり上て置ぢや。出「は。それのはや。あふち千万な



奴でござりませ。さりながら氣違の事故をうざおゆるしなまッて遣はさりますし侍「いやさ。此方ゆるす心おれども。繩を解くと又女中方へ。らうせさま及ぶゆる。是悲なく御歸り迄の番をいとして居る。此方も迷惑至極や。御尤でおさります。まのこ是から私共が引取まそからり。けッして御去やま。させませぬ故どうぞ御ゆるし下さいまし」と兩人ひたせらわひければ。餅よついたるやツかいもの。引取人ころ幸ひと。繩をどき兩人へ。わたせばうこく〜にわらさつしてわかれる。吞七は小聲よて「なぜ又わるひつこくふざけるだらう。野郎」わんまりうつく〜いやつが。わやく〜どうやしたてやアがツたから。ろこの好の道。畜生の淺間しさま。つらひつこくあるのよ。ろれよ又親父の侍めが。ひどくむくつて刀へ手をかけたから。こいつたきぬらと逃山とど。聞ねへ。奥方はるゝに御覽有て。ひかへ〜と差留遊して。わ、奇麗な男やが。乱心と見へる。ふ便な事や。随分いたわッて遣はせ。といわれた時の有がたくつてうれしくつて。ちりけ元からぢわ〜と。惣身がとけるかと思つた。〜ろをもると。

まべられたのだあ。おうさらしな。そして乱心と見へるよと云たらうが。何きれいな男だといふものか。おはかたきらひな男といつたのだらう。「なんといつたといッて。はじまらねへ詮議だ。さア〜はろくなつた。い、搦梅に人がついたから早く行ッし。船は今川丸だよ。間違めへせ。」がッてんだ〜と是より出目介。吞七へ。少し引下りのろ松のさま〜の。ろらぶとを。あやべりちらし早足に堤へ上りみめぐりの揚り場へ。心ざして来る。船中よりはるかに見て手くずね引て待るたる。あべ太郎も土手の真中に立出て来るをふとこと。待かける出目介。吞七の最早陸より用なしと。かけぬけ船へ來ッて相圖をする往來の人のうりや色氣違じやと。あつまり寄る。「蝶〜。まづかの差こめ〜。あたんぼさんや〜」と程よき場所へ來り。腰よつたたる古わらじと。あべ太郎よ打付んとらう〜。きよろ〜。見廻せと。數多の人故。さつろくるれとわからねば。紐をもつて。くる〜とふり廻す後へ。黄八丈よ七つ襟の小袖。ひおらうの帯と。朱の二重緒の雪駄をはき。耳にこのある大若衆。うツかま來か。る横がほへ



迎快半合

春御振尾尾... 灯ちんの... け福あ... 茶書の一... 連中... けは... 一... 多... 合...



中夏十の

依江界 眼七

安坂吉... 春八... 野呂松...

の... 後日... 眼七



○花屋八笑人

第三卷之五

○原五



○花屋八笑人

第三卷之五

○原五



花暦八笑人

第三編卷の上

江戸 灘亭 鯉丈子 著
東京 深川 梅園 翁 閑

春過ぎて夏来よ々々し昨日まで。笑ひし山の時鳥。四季節々の季違ひの。彼本丁巷の戯ま
（春浮氣。夏の陽氣で。秋塞ぎ。冬の陰氣で。暮のまぶつきと嘘字盡のうそならせどい
知つ、も香明し。遊戯けし八笑人。かの座頭の佐次郎。世間晴たる樂隠居。元より人
目忍ばずの。池の邊の香會所。青葉涼しき夏木立。朝顔さへも我儘よ。道わたけたる鹿
の戸。表の方より足音の。序文も記せし廻狀の招きも集るなまけ運中。打揃ふたる六
人連。先も立たる安波太郎。「ハイお頼やます。佐次郎さまは在宿でおざりませうか。
先刻にお使を下さりました。が。それには付安波太郎。卒八。頭武六。春七。出目助。野呂松
打揃ひまして参上仕まつりました。此段宜くお取次お願ひやます。」と案内すれの鹿の
うち。初へんよりしてゐてつきの居候やら主人やら。どりまかりなきがんと七があてま
帆掛てはしりいで「ハイ」。これのくお見ぐるしいお顔ばかりのお揃ひなされま

じて。悪うこそは入來。まづ〜あれへお通りなごねまし「イヤ一才お断り申上ますか。
 只今申た。まづ〜の文字よの味くないと申心の。まづ〜と書さすやうよござりま
 す。この思召であれへお通り下されま〜「これの〜。ぼ丁事のは挨拶で。痒味出ま
 す。ケ様やたはがりでの。ぼんくら様方よの。分りかねませうか。かゆみ出るごり。痛ま
 入の反語でござります。眼「へい〜。成程謂れを聞。股溜ります。これもかえんご申
 とでござります。ケナト古いから土用心仕つります。是も則はちかえんがかりでな
 ざります。あは「イヤもう。宜加減致しませう。面倒は相成まじだ。サアとあなたも上りま
 せう。辛八「左様〜かやうなどんちまの。いつまでも貧氣よあつて。ごじつけます
 のでござります。サアあなたお先へ「野七「イヤあつ〜あなた「イヤいかさま。おまじ
 退いたすの却って無禮然らばお先へ「香七「イヤ誰か叱りの。いたしませぬにやなご
 がひよまやべる贅口の解らぬとをならべたて這入口みてや、まはら〜。かん七一人を
 六人がたがひよごじつけぬるをりから。ようやく聞つけ左二郎。奥の方より聲をか

ける。左次「これ〜眼七朝化おどなら。御断り申上させへ。ア、ひ〇ッこの俗願人だ。物
 賃ひもあんまり。ひつっこひと猶やる氣がぬへ「眼七「ア云てひつっこねへとやらすよ
 仕まふし。ぞっちしても。やるののあきらみでござりませう。あは「イヤ主人御在宿さう
 な。皆様直よわれへ。さんじませう。辛八「いかさま。取次のがん色が。餘りきたなひつら
 でござりませう。野七「左様〜。それよ口中が悪臭い故應對いたすが甚はだ難儀。ど
 んど。肥取どつかみ合やうでござります。眼七「成程。あなたに。よくお心づかれた。小
 生ハ又何のよはひかどぞんじた。胸がひかく。致て。是へ參った斗で。むかひ氣が參ッ
 て。歸らうとぞんじました。左次郎き、かね「コレ眼七でへぞ。へこんで居るがどうし
 たのだ。眼七「へこむ氣のござりませんが。あなた方の狐臭が。目口へ染てごうともす
 ども。物が云れません。劣生ハモウ引込ませう。辛八「ヤレ〜嬉しや取次の者。のあら
 を向ましたから。此うち早くお上りなさい。逆も筒先への向はれません。あは「イヤ〜
 わなた。辛八「サ、お構ひなく。然らば何かまかつべらしく奥へ通り座よつ〜。野七



へ。お貸やませうとぞんじて。持参致しましたと駒形の内田の酒樽を出し「これの宮戸川より出現しましたたる所の酒無理如來の樽像。生得大酒の御酒よして。一たる愛する輩へ。博奕賽雞。けんのおんを。のがれ。苦勞不知。又辨當兩役を守らせ玉ふどの。御せひ願われれば。いかう酔て。五はい上りませう」眼七「イヨ。く。とんだ靈寶。奇妙く入かひつてつづ六「へい私しい又蠅帳を。お買なされ」と。聞達ひましたゆゑ。その中へおたぐいの品を。少くも上やうと。ぞんとして。則ちこれへ持参致しました」ト女達魔の壽を一枚出し「へい是がまづ座禪豆でおさります」又茶見せの女給を一枚出し是の「納豆でおさります。ト申す譯の去ルお寺さまの。嘆ものだトヤ事でおさります左次「見のよくなれた様子で。味さうも見えまは」さて此給のナト。鹿相な。出来でござりまするが。田舎狂言の無間の鐘の。圖でおさります。是が則ち。梅が枝田夫でおさります」左次「ハ、ア是の御自書を見へますゆゑ。一しは。賞断いたします」底でこれの。ちと時代な繪で。清盛の妾で。貞女を捨て。貞女を立たを。自慢の。常盤味噌。傍よ

今若。乙若か牛若の。數の子もそへてあげます 左次「是のく。いろく。の好物有難さござりまする」又卒八入りり手遊びの車を持出し「へい私何の了簡もあぐ。唯常家で一ッ險やうとぞんじて。表着を一種。持参致しましたが。ちと荷が張りましたゆゑ。車を一輛雇って参じました。先車ついで。片付ませう」ト車力の思ひ入よて。はらま。もろはだぬぎまより「へい此繪の頭武六さんから。池の端までかき」ト彼の景物の繪をくるまへのせて「おうだアソツ。そこでアホウ。ウハ。ハ。ハイ是へ揚ておきます。チイこの宮戸川の樽の。左次郎さままでかね。ハイく。かして参りました。イヤどツこいな。ア、ウ。う。こたアホイ。うんだアホイ。へい駒形の内田から参トました。判取の歸りよお寄申ますから。配ておいて下さいまし。ア、いろが。いぞく。アイ此おむらんの深川へ鞍替かね。ハ、ア身請かへ。うりやア妙だ。酒手の芝っかりだらう。ア、ウ、だアホイ。こたアホイ。い。イヤ是はけしからん。騒々しい事ぞぞ」眼「まかし能お似合なりました。ア、番頭さん車力を宣買。一文下さいやしといふ身だぞ」左次「東

西へ一丁此鐘の西村から道成寺さままでが子ホイ小附よ。小田原提灯か。これの通り路だから興一兵衛さんの所へとくけるのかへ。かーこまりやした。ア、ア、アだ。アホイ。ヤレ。草臥た。是でさつみんを片付た。ト座は直り。ヘイ左様なら。お約束の。針糸を差上ます。ト今の車をいだし。ヘイ是が方々の。荷つけておざります。ア、ア、アレ。騒動しい。よつけだッけ。扱はや小弟のナ。手前勝手の様なれど。無様皆様へお頼み申たい事ござりませぬ。今日はへ出ます節。衣類を着替ようとぞん。トた所が彼吉原の心慮方より。参った玉章と。ト取落しやして。山の神は取上られやした。サア八里半ならば。ニッ割にいたさうとさうす角を。二木揃べて。大嫉妬とありまして。未封も切りませぬ文と。此やうよつだく。破られました。彼心底も折角人目を忍んで。丹誠いたし認めましたものぞ。むざと捨るも餘り不便でござりまするゆゑ引ちらしましたと。少々拾ひ集めてさんじました。どうや皆さま。ほ工屋なして。お讀わけ下さります。やうよ相願ひます。トイヤ。是は珍らしい事が出来致しました。

成程おきた杯へ女の文の恭まる事はないゆゑ。ほ不得手だらう。どうもなれぬ事。よめかねるものでござります。ア。勝ぶん事慣ました。小生共故。呼でへ上ませう。が。餘り手ひさい。おたれなさり方でござれば。なんぞ受賃が。なければ。どうも。ア。それの勿論の事。何色色と師の。水金の遣ひうちのと。頼どいといのござりませぬ。文言さへ解りませぬ。ト。ア。受賃へ上ます。左様なら。是へ遣ひされ。ヘイ。コレらうじまし。情なく引裂ました。ト。分ります。終つて宜ござりますが。先それへお渡し。申ませう。ト。レ。ハ。ア。成程。天地紅で。イヤどうも懸念ものでござります。ト。フ。ア。ウ。なんだ。かけ願ひあける。ヘイ。わありました。か。み。か。け。ね。が。ふ。と。申。よ。ハ。絞。り。放。し。の。切。でも。ござります。ま。い。か。ら。あ。ッ。さ。り。と。稻。元。結。は。成。れ。ま。し。ト。稻。元。結。を。出。す。ト。一。扱。ど。な。ん。だ。ハ。ア。ア。こ。が。れ。ぬ。り。よ。ア。ヘ。イ。こ。が。れ。居。り。と。申。お。禮。め。の。淺。妻。船。の。繪。を。さ。し。上。ま。せ。う。ト。イヤ。お。も。し。ろ。し。〜。サ。ア。是。の。ま。み。〜。ぞ。れ。ッ。た。く。か。〜。ハ。ン。ラ。ま。い。ア。あ。み。〜。ぞ。れ。ッ。た。く。〜。ト。硯。と。墨。を。出。し。〜。よ。く。摺。て。お。替。な。さ。い。ト。イヤ。是。の。紙。が。違。ッ。て。居。る



けがら
糸物
たつ
趣向
人
ちや
ちや

大上様
かみ
つる
あざ
あざ

あざ
あざ



お
や
ら
ちや
ちや
の
あざ
あざ

い
あざ
あざ
あざ
あざ

が。フン一ッ百六拾四文酒五合。三十貳文味附廿八文みりん一合。チャクこりやア酒
 屋の書出したせ。「ハ、ア成程内田の書出だ。なんでも都合で噂アも半分より餘計。
 取上られましたぞ。漸々残りを集めて。参りましたら。中へ紛れ込したと見る。是は
 おぼつかしいものを。お目も掛ました。眼「モヤこれよ。うけ賃なしかチ。あ、へいこれ
 ハ。ナト受賃を。出す程の事もござりませんが。エ、ま、よ。たしか。三百五六十で。
 ござりましたが。ト奉納太刀を出し。一本わげるから。すっぱり拂ッておくんなせへ。
 アハハ、ハ、ハ、ハ、さめう。カア是のなんだ。解らぬ筆だ。ハ、アまの字が破れた
 やつだ。よ、ま、いらぬふでゆゑ。よしなよよみわけだ。ナット廻らぬ筆なら。此ぶ
 ん廻しへおぼめな。自由も廻ります。そこでもうなしかね。眼「イヤまだ爰も。一切
 ありやす。呉く。はたがへるふ。ほいで程ひとへ。あ、く。相違なく浮山なれ
 べ。ト手あそびのあんどろを出し。先こ、いらでござりませう。まかしたまさか書中よ。
 出ます事もござりますが。それの急の用事でござります。眼「イヨ受賃のは趣向。請まし

たり。カア出目助様君の番だ早く御趣向うけたまはりたい。出目「どう致して得ぞん
 じの。愚案の私。趣向も五こふもござりませぬ。寔にこくなもので。只人さま
 のとよこくと致して。見るばかりでござります。宿を出すにも。偶然と出ましたか
 ら。売手でおざりやい。併し途中で此給を。見當りやしたが。餘り威勢のよい書ゆゑら
 ツかり買てさんトやした。是御らうじよし。四天王が蚊を退治致す。所でござります。
 是でもお土産よ。進ませせう。左「それはや思召の有がたうござりませぬが。私の禁物で。
 蚊ハ決して喰やせん。底でその跡がどういふ御趣向だチ。出目「へい只今申す通り外
 に趣向がよい事ハ。決てござりませぬ。眼「ソレでも。給を出した斗りてハ。痴瘡見舞
 のやうで。余り手の無い事でござりませぬ。出目「さやうなら正直に申ませうが。此蚊を
 持てまらったのハ。何もせせず天窓から呑うといふ。心いさでござります。眼「ヤレ
 く。むさうさ事だぞ。左「蚊だから。大方そんな事だらうと思ひましたチ。イヤ皆様
 御趣向感心く。あ、皆小生共如様よ。少くも土産を持参致しませうら。此方

かゝも何ぞ。御馳走が有りそうな者でござりますナ。いかさ。如何様併し。それの
 定めて御承知でござりませう。ナ。眼七の「ハイ。かしてまりました。ア。まか
 し。今日の生憎仕込がござりませんで。」「イヤ。そのお仕込のない所で。何ぞ。二種ちよ
 ツ。ぴりとナ。」「さう。おツ。やる事なら。是。悲がない。勿論。料理番も。あり。合ませぬゆゑ。
 わたくしが。掴み。料理を。さし。上ませう。」「これ。一段の。事で。ござりませう。」「ハイ。
 早速。お。向島の名物を。差。上ませう。」「ト。わ。太郎が。文。が。ら。を。い。だ。し。あ。な。た。方。も。お。
 い。ち。そ。ト。ハ。中。し。み。が。ら。あ。バ。太。郎。殿。が。ア。ノ。顔。で。懸。が。出。來。た。ト。云。れ。た。時。の。定。腹。の。皮。
 が。い。たい。程。か。し。う。と。ざ。り。ま。し。た。あ。な。た。方。の。如。何。で。と。ざ。り。ま。す。」「イヤ。や。可。笑。だ
 ん。か。此。顔。色。で。色。事。ざ。ん。まい。イヤ。大。笑。ひ。で。と。ざ。り。ま。す。」「ハイ。それ。が。則。ち。笑。ひ。懸。で
 と。ざ。り。ま。す。」「ヤ。レ。レ。御。飽。丁。の。ト。付。担。荷。感。心。致。し。ま。し。た。」「叔。父。重。平。か。なん
 ど。吸。ふ。物。を。一。ッ。上。ま。せ。う。」「ト。又。ふ。み。が。ら。を。ど。り。ち。ら。し。」「ハイ。是。の。う。そ。く。づ。で。と。ざ。り
 ます。」「チ。眼。公。ら。よ。ッ。と。立。て。貰。ひ。て。」「ハイ。レ。レ。イヤ。を。ッ。て。ら。」「ハイ。た。ち。や。し。た。」「左

帯を解し。」「何故でござりませ。」「ハ。サ。サ。な。せ。で。も。い。ひ。か。ら。さ。り。レ。レ。解。ッ。せ。へ。
 皆。様。へ。御。馳。走。す。る。の。だ。」「ヘ。エ。お。か。し。な。御。ち。さ。う。だ。ッ。眼。七。の。ふ。せ。う。レ。レ。ま。お
 び。と。と。」「ハイ。解。ま。し。た。」「と。い。た。ら。單。物。を。脱。で。爰。へ。山。さ。ッ。し。」「ヤ。レ。レ。漸。々。昨。日
 買。た。單。物。を。も。う。ぬ。ぐ。の。か。な。さ。け。ね。へ。事。だ。」「それ。だ。から。入。用。だ。」「ハイ。レ。レ。サ
 ア。ろ。れ。へ。ま。げ。ま。せ。う。ぞ。命。バ。か。り。の。お。す。け。下。さ。り。ま。し。」「諸。眼。七。が。單。物。の。昨。日
 富。澤。町。で。買。て。さ。ん。じ。ま。し。た。ゆ。ゑ。是。が。み。ッ。も。の。で。と。座。り。ま。す。又。跡。で。お。茶。漬。で。も。お。上
 り。な。さ。る。手。當。み。の。ト。眼。七。の。権。へ。ゆ。び。を。さ。し。」「これ。は。煮。染。が。と。ざ。り。ま。す。」「是。の
 く。あ。と。の。お。茶。漬。は。手。厚。な。事。成。程。此。お。煮。染。の。よ。く。揃。が。し。み。た。や。う。で。見。た。バ。か
 り。で。の。ど。が。ピ。リ。レ。レ。か。わ。ま。さ。す。」「併。し。鬼。の。なら。虎。の。皮。で。致。し。さ。う。さ。も。の。で。御。座
 り。ま。せ。ナ。」「ヤ。是。の。御。も。ッ。ご。も。で。御。座。り。ま。す。が。何。分。急。案。ゆ。ゑ。行。届。ら。せ。せ。ぬ。も。御
 座。り。ま。す。が。こ。こ。が。兄。弟。同。様。の。中。ゆ。ゑ。あ。な。た。が。た。始。め。同。じ。様。な。事。を。い。く。度。か。く。ど。う
 致。し。ま。す。所。が。矢。張。お。一。種。で。御。座。り。ま。す。」「ヘ。エ。レ。レ。又。と。う。い。ふ。お。若。に。な。り

ます「ヘイ兄弟の集りました所へ。趣向が工藤出まされた。これが則ち御座で御座り
 ます。扱お望みなら。まだいか程もあ香の出来するが。如何致しませう。」「イヤヤヤヤ
 もう。澤山で御座ります。」「さやう。」「此うへまだどのやうな。こじ付料理が出来る
 も。忘れませんでした。かころしい事でござります。」「イヤ御遠慮。なごりますな。」「イヤエ
 くどう致して。決してお忘さいたしません。もうく眞平御免なごります。」「目」ま
 かーあがら。眼七どの。御趣向を。あんどお願ひ申したいナ。」「ヘイわたくしのはや。
 御ぞんじの通り。居ひの身ぶんゆる。何も御馳走のいたし様も。御ざりませんが。只今
 主人が。たいめんをこじ付ました。驥尾に付て貧乏人相應に。曾我の役割を。一兩人御
 覽に。いれませう。」「これハ又。氣が變つておもしろう御ざりませう。」「さて先私じが
 鬼王貧左衛門で御ざります。所が此節二役勤めする様よ。なりました其譯ハ。一向御
 酒が香なくなりまして。此頃の猪口に四ツ五ツも香ますと。足元も定からぬやうに。な
 ります。是を名付て。よハひ酒のひよろくと。申します。」「ヤレ。」「主におごらぬこ

とのけ人で御座ります。辛八左様で御座ります。前置の枕のかり長ぐて。へたてじも
 ない。事斗り申す。」「眼七」「ヘイ左様なら枕なごじに。頭武六さん一すお目にかゝりたい。」「
 「ヘイ。」「何御用で御座りますか。」「眼七」「ヘイ此人の顔が。さやのの髻たいで。小びん先
 ハ。元清も御ざります。」「ナヨッ。」「め。また面の店おろした。」「さ。こでさな
 だでも。はなが子を一枚頂きたら。」「辛八」「ヘイ。」「是でよし。」「この有りがたら御
 座ります。」「ヘイこれが直に。景物でござります。」「御趣向ハ。」「ヘイ無銭の算段。小半紙
 の。安ひのでござります。」「目」「イヤヤヤ。たま〜景物が。出たと思へば。人比はなが
 を遣ひ。餘り無禮な。けんやくでござりますな。」「それが。則ち。曾我の發端でござります
 す。」「目」「イヤヤヤ。」「目」「ヘイ景物の。買でござります。」「ヤレ。」「苦しい
 こじ付で。こごりますな。」「左「モウ。」「能かびんに切上た〜。柏子にか。こじ付
 る。おかしくもねへ。サヤ〜酒にまよ。酒にまよ。其ア宮戸川を。さやめけよう
 」「目」「チャット。べたり。サヤ此方の世の中だぞ。チ目出目公此片口へ出して呉な。其うち此

方ちの肴さかなを出すのだト。是こゝにより例れいの通り肴のみにはじめる。左次「サアあんまり酔ねへうち。相談を極きりておかう。酒くわい状じやうもも。一寸書かての出だしたぜ。今夜こんにやの寄合よひあひ。春はるの花見はなみ茶番ぢやはんの事ことだが。おれが黙だま止居とどると。誰たれも構かまへねへが先まづ第一だいいちに己おれがいたゞひて。其次そのつぎは野呂松のろまつがまぐまぐたもんだから。流石さすがのこじつけ連中れんぢゆうも。その次つぎの羅漢らかんのと。すみ人がなかつたから。するくべつたりと。つぶれて居たが。何なんとれっきとじ。ハハあんまりれっきとじ。まねへけれど。サハ人男にんなんが話はなし合あつた事ことを。反古はなごになされぬへでいねへか。それともまぐまぐにるまでよも。趣向しゆうかうがつかねへのか。辛辛いハハハハ仰おほいさやうさうさ。さふまやあよぶさ。趣向しゆうかうも案あんじる。山やまくだけれど。みんながひるんでゐる様子ようすだから。己おれ一人進すすんでゐる。トさらぬへから。あは。「なんのくく。ひるむの夜よるむのとらぶ。けちな事ことがあるものう。案あんトはその時ときつけておらんが。誰たれもなんともいへず。殊ことに毎まいとんのやうよ。茶番ぢやはん引ひつゞくし。出目しゅもく。「そりやア。おれも同じ事ことだけれど。それはおらア女おんなの方ほうだけ。格別かくべつ用ようが多いからツイ」左「エハハハハ。又またびらくはじめるよ。マア相談さうだんの極きりまでい。尻しりつかいどで

も。押おしつけておかッ。そこでマツ斯まうようといふ注文ちゆうもんだ。つが。ううア妙めうだ。香かうト「まだ何なんともいへねへ。」「道理だうりで聞きへなかつた。左次「ムハハハハハ。古風こふうな豆藏まめざうだ。是こゝにサ。マツ。ませッけへさばに荒増あらいましの相談さうだんを。さかッしな。どうも思おもひ癖くせだア。ムン底そこで左「マッ此趣向このしゆうかうの初はつ一念いちねんといふもの。毎日まいにちく八日やつか積つける積つりの所ところが。隙行ひきまわ駒くまのめし早く。光ひかりむんに關せまりなく。木梢きすえの花はなも青葉あおばと變かはじ。昨日きのうまで片言かたことをいひし驚おどろも。今いまハ。繼つ子をさへ育そだて上あづつ。辛辛ハ「イヤハヤ奇妙きせうな相談さうだんのまやうだぞ。ませッけへせとらへねへ斗はな云い様さまをするものだから。こたへてい。居ゐられねへ筈はずだ。左「それだとッて。おいらがさる相談さうだんに。只ただの人ひとらしく。扱あつかひ様さまくも義ぎで左様さやう致いたしますれば如ごとく。様相ようさう成なりますなんどと。不風雅ふふうがにも云いれぬへまやアねへの。辛辛「イヤく矢張やばり風流ふうりゆうがい。おめへいたゞの人ひとでねへ積つりでも。餘あまり錢ぜにの出でた人ひととも見みえずサ。なんでも相談さうだん事ことハ。どこまでも野夫やぶにゆく方がい。そしてなんだかむだな言草いぐさが。馬鹿ばか長いに。おろアしく。節付せつづけをして云いもんだから。ツイ南無阿彌なまなみといふ。返辭へんじをするも無理むじいねへ。マ



ア〜つままでいへばはるの花見茶番の残りぞ。六人で一狂言づゝ。やらうと。いふ事
だらう。左「そうよ。そうだけれど。八人のうちには二人濟で。あとが夏までのびたりら。
いッろの事今年中の樂みとしてサ。夏二日。秋二日。冬二日と割付よう」と云ふ注文が
がどうだへ。香七「ム。それも能らう。左「先陣の争うひが面倒だから。すい十八日
での名題を拵へて書て置てから。是を圖にして。順を究ておかう。或やアおへか。眼七「サ
ット圖も名題も。ちやんと出来ていやす」と眼七ふくろ戸より。丈々長へ書た名だいと
くじをうや〜。ま〜二をうへのせて出す。香七「イェ〜。是のりッぱ〜。グット是で圖
取ぬいてきた。序に狂言名題を。抜口〜。句イ線香。清明香。〜また交るよ。漸
々すこし舞臺が。ま〜りか〜。ツた所だ。東西〜。左「イヤ抜口ハ圖を引て。皆役割を書
入てうら。よみませう。香七「ム。それがい〜。飛鳥山の花の雲。相魁めまする。役人
かいなをひッくじさか。出目「エ。やかましいわへ。サア〜。圖を出しな。サア〜。ト六
人われも〜と引圖の名まへ委しく書そへたる張出しの役割を聲高らかお讀上げり

花曆八笑人

第三編卷の下

江戸 瀧亭鯉丈子著
東京 深川梅園翁関

儲も八人の役割を圖にて定め。鴨居へ立派な貼付て置。「サアまづ斯外題ハ付て置け
れど。是ハ只順番を定め〜。場所ハ各自の好み通り。案トの付た事が宜せ。早イ事
が兩國の涼の題でも。モシ腹に合せば隅田川へ以てゆくと。利根川へ飛込とも。勝手
の宜所が宜せ。〜。ろりやア違へねへ内輪の茶番こそ。意地悪をして。まごつりせるな
んどもおもしろくして宜けれと他人の中へ押出す事だから各自磨合て岡目八目の助
言を加へて何んでもあくならねへ様にすッぱりやツつけペエ。コレ卒公志ッかりと
揮をンてか〜。ツッしヨ。卒八「ヘン何是芝きよ。揮どころか。ト卒八がすましてゐる顔
を見て松王丸のせりふ。眼「今せうッぱりの手なまみよかけて。拙作か。い〜。作か。至極
御苦勞の世界ッ。野七「ナンダ〜。まだこトつけ足ねへのか。い〜。加減よ。愚知もいふも
んだ。香七「イヤおようだんでいねへせ。春のやうま〜くぢッてハ恐れる。今度のまッか

りもふけてへもんだ。ほんよ卒公まッくりさッし。春中のも随分出来の宜げれど。かんぞんの所でまくとるからどうもあらねへ。何でもここの桶の荷縄をねへが。大丈夫よまておかねへと始末のわりい事が出来る。違へねへ。卒公マア案事ハ附てゐるか。左次「へん無ッてサ。コレサアそら尿落付が浮雲の親玉だヨ。サレハ雪隠の上水を見る様に。氣をすまして居て。大へんな事を仕出すめへせ。コウ貴公等何の事たナ。ヤ肥桶だの。尿落付だの。ヤレ雪隠の上水だ。ぞもせへ。壁斗りいふ手合だ。それがはんの。まやぶッ臭いといふのだ。眞のてッたが。己がたッた二言の筋點の打人があるめへ。左次「い、サ。其廣言の後へ廻してマア早く筋を聞てへ。さうよ今日の様よ各自懐でやつてのゐられねへ。何でも物座中大承知の入道へ。木賊とむくの葉をかけて。磨上た所で。押出すが宜。そうさ。何程己が番だッて。大丈夫といふ譯にいかねへ。丁度三津五良宣敷でハ。狂言が出来ねへ様なもので。外が何ぶん若イ衆太せいといふんだから。萬一又仕損なふめへもんでねへが。どうでも

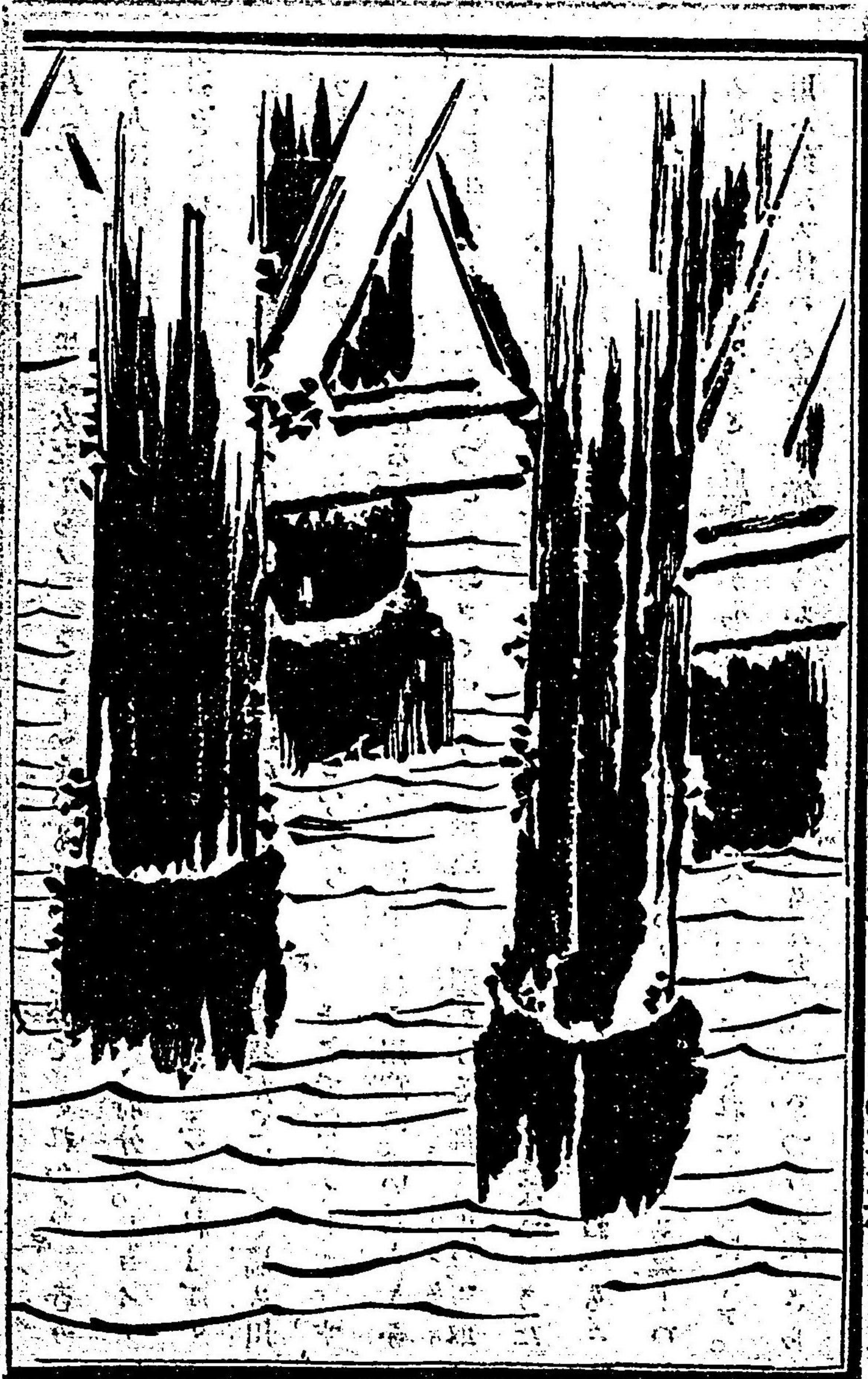
斯でも八日目迄ハ。叩ねへでハなふねへせ。卒ハさへ。あの通だから。とても己アなんぞとひるんで立消ハなられへせ。野呂「アレ。もういたまく杖を並へるせ。こいつアけんのものな狂言方だ。左次「サア。跡の事より今度のたうるのだ。早く云ッせハナ。卒「コウビツくりまなさんナ。餘程ハ、せ。マッ斯だ。つて。こいつア宜らう。何が、い、のだ。い、い、ねへ内が。よりらうと思ふのヨ。今はめねへと。言出してからハ。はめる所が有めへとおもッてよ。左次「是サ折角本讀が。始りそうになると。まぜッけへすから。どうもみらねへ。マア少時のうち。ちんぼまて下せ。卒「そこで筋ハ二ツあるが。左次「ハ、ア子持筋か。卒「まづ子持ハエ、どうも交ッ反した。釣込れてならねへ。左次「チイ眼公。一盃燭をつけさッし。みんな口が隙だからやかまし。マッお下の衆も。一ぱいのまてやらッし。是より酒をばため。みまのみながら聞て居る。卒「まづ二ツの斯い趣向だ。餘程おかし。せ第一おめへたちに。切かけも稽古もならねへ。間違がまッして。己一人狂言だ。道具といッた處が。家根が一艘に小舟が二挺を





りけなさんナ。これでも合引で。ぐッて目をつりあげて。かつらをかかけて。見せたら。驚愕するだらう。野暮「こりやア。びんくりするに。違へねへ。氣のよわいもの。おちけへるだらう。目「ろうよ其目の矢張釣下った形であくよからう。とこも。つり上くらのナ事で。女の顔どの見へまい。」眼「ハッお顔に。なるだらうけれど。」左「イヤ。サ。ここでこそ。南傳馬町の。仙女香の十袋も買て。二三日か。ッて。地を塗潰しでも去たら。此の顔らしくなりも去やうか。然してまアどうするのだ。辛「かつらに。さら毛よして。ぐるく結びがみに結て。止。びツと亂れならうといふ誂へだ。」左「イヤ。しろれも吞込だ而して。」辛「底で己が方に。後見が一人。そのの雇ッてでも宜から。舟に居るものが。なりたけ多いが宜。といふわけに。先本舞臺三間のめいだ。兩國橋の景色下の方よき所は屋根舟一艘。」目「ハ。ア又屋根舟が。」辛「其内は連中矮らす。合圖を持て居やす。ここで己の。その美。いなりで。橋のうへを去はく。」と。物あんど姿で。遠近うろくして居やす。」目「マが首尾よく姿を見れば。」野暮「ろうよ。太面で。ふツとりと

した。色のシッキリ黒い女だから。」左「イ。サ。まづものあんど姿で。それから。」辛「ありたけ人に怪れとるやうよ。高欄へ寄か。ッたり何うして居て。い。時分に。ヒョイト引ぬきで。眞ばだか。徘徊一ツになつて。其時後見が。着物の始末さへ。まてくれ。ばい。のだ。さりと髪をみだして。ボン。ト川へ飛込のだから。リヤ身投だといッて。橋も川も大騒ぎに。なるだらう。」野暮「違へねへ。是はおごろくだらう。」辛「そこで暫らくして。すいと浮出して。遊ぎはじめる。と。たんに。船の中からの。連中かねて用意の。いろく。あ魚尽しを張子で。拵へたやつを。かぶッて。ボン。飛込。追がける。都て龍宮。玉取のまねびとなる。といふに。どうだ。」左「ヤ。これの宜らう。妙だ。みんなのやうだ。い。こりやア。やッて見て。」目「それだから。どうも人の見くびられへねへもんだ。卒公。是斗り。一生の出来だぜ。」辛「ハッ。是が氣にいらす。まだいくとも案トの。あるせ。」野暮「またはめると。直慢るから。どうもならねへ。」左「サアそれにとるにやア。入用ハ何だ大体ハ。今夜の中勘へて。おくやうに去てへもんだ。」辛「まづ今云た。さら



ハヤトツ
コイ
ウツナツ
はた下ゆき
もろんも
てぬん

毛のかつらに。女の衣装。これのおだるさんのと。借ても間に合ふが。徘徊の一筋。おどらせのなるめへ。濡すから。野呂「然く。それには仙女香が十袋。ア、あかし十袋で足りよるか。香」ハハハ十袋で五百だか。もうさつと出せくらゐら。こんな首のそば替る方が。安くわがるだらうせ。「何下塗の。胡粉のつけたてにせず。凸凹が直るめへから。上塗斗りの十袋も。有たら宜う。卒」エ、面の事。手ゆゑ。ッ達の知事。でいねへから。構ふなへ。それよりきつかけ。まらげへねへやうに。氣を付さッし。時に左次さん。お下の拵れへり。魚尽しの張子斗。だが。どうあよう。左「ろりやア。車の付た蓋を。ひッべがしたり。又かつは蛸の類。その外何でも見斗らひに。淺草寺の中店へハッて。見繕ッて来れば宜いサ。あば。ここで切ッかけ。らあり。卒」七むづかし。事いねへ。おれが橋から飛込で。遊ぎ出すが。相圖マ。ム、よじく。暫く身投と思はせて。一たび。もぐらだらう。それから浮身出た所へ。舟からボンくと。イヤ待ねへ。己ア遊ぎを。知ねへがよからうか。左次「ナニ遊を知ねへ。ろりやア。こんな事だ。それでどうして。大川へ

ン所か。けしからねへことだ。あめへのとうだ。左次「エ。己か。おれもサ。ナトむづかしいテ。卒」何ヲ見事に。やりたがらすとも。ちつと水心さへ。あきばい、ハナ。左次「鰐ヤ鰐を。かぶれば。魚心もあるけれど。水心。らッとも無テ。卒」イヤ左次さんも知ねへのか。左次「今いふ通りヨ。つが」ッリヤア。つまらねへ。實の。我輩も不得手だぜ。野呂「何の事だ。それでまた。此くはだてよ。連判をすえる事もねへ。ばかくし。眼七「ろりや。それでは香公。出目公。野呂公ト。たツた三人だノ。出目(香)(野)「所が同じく。水まかけての。鉄炮玉マヨ。卒ハ「イヤハヤ。不器用な。手合だナア眼公のとうだ。眼七「ムク己アマア。板子が一枚あれば。三尺や四尺の。浮てぬられやうと思ふが。久しくやらねへからだうだらうか。あば「アハハハハハハハ。こつアつまらねへ。此様子で。卒公造。おぼつかねへやうだ。卒ハ「なんのおらアおぼつくけれど。左次「足下のおぼつくにもしろ。人の遊ぶのを見ても。こッちらもさへく。何でも悪い案事だ。そいざきさらねへで。勤まらねへト。いふ舞臺もねへもんだ。卒「無ッてサ。水仕合といふ事もありマア。全躰いけ

不器用な手合だ。へん江戶ッ子の面よし以來おんまより。りきんだ口を。利ねへが宜
「べらばらめへ。江戶ッ子だから知ねへのだ。銚子の濱で。いわしを漁てた人さやア
ねへのエ」左「イヤサ。イヤサ。己をはため早呑込の。輕はづみ斗りやるから番毎まぐし
るのだ。最初に遊ぎもまらねへで。この相談にかゝるといふがあるものか。こりやアみ
んなの粗勿だ。あは。ううだけれど。己一人遊げるとして。人の心もまらずよ。こんな趣向
をつけるといふもの。あるものか」卒「そんなら。何故ら、くごらして。相談よか、ッた
ヨ」おは「その時。よかつたやうだッけが。今思へば」左「エ、何をくだらねへ事を。ぐづ
くじがみ合の。それよりマア斯したらどうだらう。折角よ卒公も一生のちをを
した趣向を以て。押出ねへのもくやしからう。そして。まんざらでもねへ案一だから。
やッつけるぜら」あ「ハ、マ。卒公ひとり飛こんで。ひやみと川の中を遊でるのか。
ン。それからうらうら。氣ちげへまみて」左「おに逆も。獨りでつつまらねへが。今度の合
番匠の。れん中で然ッても。外に仕打がねへから。遊ぎをまつた人を。頼んで相圓のさ

ツかけを。此方で差鐵をつかへば。出来る事だから。斯まやせう柳ばしの住吉屋の船を
借て。亭主の次郎兵衛に呑込せて。近所の若へ衆をたのんで。飛こんで貫工面にまよ
う」卒「ま、それが宜々。何こんなぶさような。あひてを取ての。狂言があにくひ。相手が
確然だと。ぐツとのりか、ッてするから。大きよ仕い、」出目「なんだ。ごたいらうな。橋の
上から。川へ飛こびとッて。狂言も大わらひだ相手が善とッて。悪いとて。ごごよ仕打
が。あるものか」卒「それでも手めへたら。勉まらねへでねへか」出目「まれた事ヨ。川
へ飛込なんぞと。いふ様な事やつし方の。本役でねへ」野「へん。こんなやつしが
た斗あるから。芝居が六ヶしいのだ」左「そう言まやんな。春の隅田川の狂乱の。大やつ
しだッけ」眼「所が。まひせへ。氣ちげへのうら。かありだッた。が。引拔でグツトき
れい事に。ちらうとすると。忽然川のあかへ。すばんと落込て。ヤヤンくヨ。是則身
小應せぬ事を。天の然らしむる所だ」左「イヤサ。川へ落込たから。濡事師だといふ事よ。
さも無ッてぬれそう十所のちツとも無ハサ」野「イヤ、マ。打遣ておいて呉ねへ」左「うッ

ちやッて。おかねへとッて。今更うの面がさうなるものか。〔辛〕違へねへ。野呂松が面もつりひ道の。無ふ自由なつらだよ。眼が細く。つり下ッて。色ハ白と青と黄を交て。なんだからやみッたらしい。徒暮氣面で何でも本役ハ。半道やつしといふのならう。〔辛〕「へん半道やつし。九の前老や。十が聞てあきれらア。鬼よ角婦人方へ向く。さりやうハ。殿達の。氣よハ入経へもんだ。〔辛〕「さりやうもすまじい。飛龍よ。似たつらだア。〔辛〕飛龍でも五兩でも女中方のお賞が。くもらぬか。みだア。今度ハ己が面も。さして入用でもねへ様子だから。マツ犬の尿のぬへ所へ。ろッとおいて下ッし。それよりマア。押出すさんだんを能く極るかい。〔左二〕「よ。是ばッかまハ。違へねへ。今度衣裳がおたるさんので濟から。かづらを一ッ借ればい。禪ハ廣小路の松坂屋で中巾を六尺。ナイ眼公今夜一寸。買て来て裏のおツかアよ。頼んで置ッし。〔眼七〕「ナットそれハ。承知の濱だが。魚盡一の冠ものハ。どうぞやう。〔左次〕「それハ。翌日の朝。中店へいッて。買集れば宜が。薪宿へいッて。人足をたのますハなるめへ。アハ。イヤ。くろれも。次郎兵衛が所へいッてた

のめハさじか。ッて。問よ合よちげねへ。〔辛〕「そんならば。外ハ稽古もいらす。たハ橋の上よ。後見が。一名あれバ宜。〔左次〕「成程。そうだく。一人といふ事ハねへ。ある人だから。三四人も連れてゆくが宜。〔辛〕「何サ。不器用な手合が。なま中大勢でハ足手纏ひ。邪魔だから。春公ひとりで。澤山だ。やッて下ッし。〔辛〕「へんそんな病人役な。外の者よさッし。己が自身よ手を下す程の事もあるめへ。〔辛〕「何サ役不足をいふ事ハ無わす。逆もあ下よ。勉まる役でハねへ。うら。足下よこのひのメ。いはハ。所作楯の相手といふ。様な者で。餘程骨の有役ぞ。〔辛七〕「ハハ。ア橋の上で。たてでもするのか。〔辛〕「いんにや。たてならしい。が仕打でゆくやつだから。むづかしいヨ。〔辛〕「ハハ。それでハ。ト思入といふ所があるのか。〔辛〕「ある所か。大思入だ。なせといッて見や。老よたいが身投出た女だらう。それだからおれハ。始終内心よ愛ひを含み黙然で往來の人よも怪しめられる程よ。而ど仕打で愁歎だから。其相手の甘口ぶやア。勤まらねへ。〔辛〕「イヤ。其面で。愁歎をさされて。傍よ居られるものか。おろろしい事だ。マッく餘人へお見せなせへ。わ

たくしのお断りだ^卒。」「そらうって呉るとりね。」「チヨツ。い、い。そんなら眼公やッて
くだッし。今いふ通りのすぢだ^{眼一}。」「何よし悪い筋だ。辻焼にまかあるめ。」「シヤヤ
交ていかねへ。マア聞ッし。底で美くしい娘が欄干へ寄りか、ッて。愛ひよ沈んで。
ゐる様子だから。足下がいふよ。モ、姉さん何だかおめへの怪しい素振だが若氣の
至りで。何か一頭よさし話た心から。ふ、簡でも出しのまねへか。いふをきッかけ
に己の帯をゆるめてポイと脱る斗りよ。身づくろいをまながら。ハイ。御深切にお
嬉しうござりませぬが。どうあつても死なねばならぬ身のうへ。かならずお留をさッて
下さりますな。おんかんど。それから人の集まるまで。出たふめを押合て居るのだか
ら餘程むづかしい役だぜ^{眼七}。」「。何の事かね。太神樂の神主さんでも考てゐるのだ
ナ^{卒八}。」「とんだ事とい、ねへ。大違へだ。おやまが。本性で確乎してゐるのだから。道外
ていかね。」「それだけ。尙苦しい。大方其面ではなして殺して下さんせ。なをと
いふ氣だらう。おそろい^卒。」「ハ、その面く安ッばくいふければ是でも合引をか

けて。拵て見せてへ。真ふ餘程拵へ榮のそる顔だせ^野。」「拵えばへだ。ッて。ばえねへ
とッて。其つら何程だ。ばえ様とするものか。」「あかじ出来榮へまめへ。鳥羽書
やうよ。ならうヨ。」「チヨツ。らめへましろ。ヨシ。今夜一寸拵へて。見せへ。お
だるさんの所で。白粉をもつて来て。」「イヤ。そりやアおめんだ。晝間ならがま
んもまやうが。夜る夜中そんな事をされるト。おらアたちまち。驚風の虫が出らア。其
暇ももうチツト。蚊いぶしても。あけさッし。おそろしく出てきたぜ^{左次}。」「そらう。
そとして。面のもんちやくも。大概はおッ付ておくが宜。何も卒公に限った事でもねへ。
己を除て見るも。あとも首らしのもの。」「一ツもねへ。ハサ。ろうて見るとみけんちや
くの火花の様。首のとも喉だ。」「ハ、何おめへの首を一ツ。除るわけもねへ。同
ト陣笠首の事だら。一所へ實檢させるがら。」「うれよして。もうちツと。大きい
もので二三盃やらかした上。二階へいッて御寐ならう。眼公勝手をおつたやうもちよ
ッど蚊屋をひッばッておられてきたッし^{眼七}。」「蚊屋の毎年四月上旬より。八月下旬まで。

たいら一めん晝夜釣ッばなしでおふるまひやすけ。出目「ヤレ〜くろれでの。蟬蚊が這
 入て居るたらう。眼七「ま、もう餘程追こんだらう。明日の晩あたりからい。モウ外へ寐
 る方が。樂だらう。左次「是サ。ねるなら。みんなのはやく寐て。あしたの早く起ねへと。買
 物が間合ねへせ。そこで相手いよく。眼公の眼「どうも仕方がねへ。見こまれた
 が不運だ。やらかす。ペエ。まかし。獨りでの。何分立されうもねへ。香公もがまんしてや
 ヲッて下ッし。左次「ナヨッ。どんな目合もんだ。器用な生れるト。何事より一鼻がけ
 よ。頼まれるから恐れるテ。ろんならマツ大神樂の。お龜が濟でうら止禪一ツになッ
 て飛込あとの。さもの、始末としてやればい、のだナ。眼公香込だらう。よし〜サ
 ア其つもりにして。寐よう〜。眼「禪も翌日の朝の事ヨ。ろの代り余程。早く起ねへで
 かならねへ。今夜の。香散としてあかう。あば「サアみんな二階へ来さッし。左次「ヨッ〜
 そうみんな。天井されてい。己が淋しい。二三入下の蚊屋へも。ねてくだッし。ろして翌
 日の朝の。酒法度として朝食の。廣小路へ申し付様。サヤ〜下住居の。人足手合蚊屋を

引張てくだッし。サア卒公のせこへいつた。眼「小便にでもいつたらう。左次「べらばうナ。
 内に小便所の有のに。サアお床をのべよう。ト打寄蚊やをつま寐さ〜くもでき。左次「卒
 ばいどうしたらう。永へ小便だ。小便二丁尿八丁と云て何様に永くッても道を一町歩
 行した程で出切るものだが。斯永へ所ハ十八丁もあるいた牛の様だ。眼「小便ハ牛だ
 が。左次「サット馬だ。トいふのか。おれが種を蒔テ。其方ハ洒落られてたまるものか。トい
 ふ所へ卒八うら口を来る。野三「どけへ行たの。卒「小便を出たら。あんまりい。風が來
 るから涼んでゐた。左次「ナせまた外へ垂るのだ。地犬といふものハ仕方のねへものだ。卒
 小便ハ外へたれねへと永く成かふサ。左次「ナヤ何故。内的小便十八町といふから。左
 次「ナヨッ。いめへましい不意を打れた。アサ〜寐るぞ〜。二階でハモウいきつゝい
 たと見へて。大分静になつた。野三「ウ、二階が静になつたら。下での酒を始めて。モウ肴
 がねへか。たい香とまようか。左次「ヤレ〜大ぼねと打てたいの。む迄トつけたナ。
 最ろれからすれば狐けんだらう。卒「イヤ〜。是から又香だら。あした天窓が病で鼓が

するので初音エ〜トイふだらうぜ。左次「エ〜。SげひつツこS。ご送こじつけるのだ。己ア。モツ寐る〜。イヤとツこいナ。ト蚊やへはらりヤレ〜。裾も廣げねへである。いけぞんぞいな釣さまだ。サアみんなが遣入ねへか。蚊をえ入れられて恐れるから。かれが木戸番をしてやらう。野郎「打遣ておきねへ。初めて蚊屋へ遣入のえめへし。左次「そ

ういふけれど。おらが内のいもへぎの窓でねへ。無垢のもへぎだせ。野郎「へ〜。もへぎの窓といふが。あるものか。紙帳馬鹿としてむらア。左次「サア〜。笑談でねへ。キリ〜遣入ねへか。怒れツて〜。野郎「ナイ〜。サア眼公。一所に來さツし。モウ三度目の知らせが鳴たから。小便なら樂屋を早く出さツし。左次「エ、むだツ口より。蚊屋が帯へ

びツか〜ツてゐ〜。い〜くぢのねへ卒ばいごうした天昇まゝかの。眼「ナアニ今方二疊へ遣入たツケ。左次「何小座敷もゐる。そりやア又何が探しツ事をきて。ゐるだらう。いめへまじいへらばうだ。眼公見て來さツし。眼「ナイ卒公。來ねへり。ナイ〜。卒公〜。サ

ヤ今小便をして來ておすこへはいつた筈だが。蚊の喰のよ寐てもゐめへ。左「何ねるも

のか又何か。い〜づらをきて居やアがるだらう。あすこを取散されてい。恐れる眼公い

ツて引すりだして來さツし。眼「ア、世話のやけた。寐るよも。直すなをにの寐ヤアがら

ね〜ト小言をい、ながら。彼の小ざしさの口と開るとたんに。内よりマツ白なくびき

出し。卒「ワア。眼「キヤア。トラ〜ろへたほれる音。何事にやど左次郎。のる松。蚊やの内

かどび出し。かけくるあたりが鼻のさきへ。せうじのうげより。卒「ワア。ふたりもおなじ

くぎよツとして「エ、ハ、ハ、ハ、誰だ〜。卒「ア、うらめじや。マロ〜。野郎

卒八だ〜。エ、びツくりさせた。なんだマア其面ア。眼七のよう〜。おきあがり。眼「マ

ア悪い晒落だ。己ア實に氣がどふくなツた。をか〜しい。左次「そうよ。我輩もまじめで

かどろい〜。わりいまやれた。そして智慧のねへ。ワアと何の事だ。おけいきな。卒「何

ぞおどす氣でい。決してねへが。實におれも。ナト。安心ならねへから。さツき。おだるさ

んの所へいッて。化粧道具を借て來て。チヨット。やッて見た所だが。随分うつくしか

らう。左「大きあべらばうだぞ。駄菓十屋の牛皮のやうなつらざ。どこへもち出されるも



のか。翌日己が髪を束ねるから。ラッちヤッて置ッせへ。眼「成程。面を拵たら。ビックリするだらう〜」云たか。違へねへ。さうせへ。ビックリしたせ。まじめた目を廻して。こなッたア。息〜。一ト眼七が小言をい。もおかしく果わみな。天笑ひ明日の手筈をやくしつ。ちがてぶい。と入りける。

瀬亭曰はや夏の夜の明やす。早朝より支度と。のへて今度ハ一番卒ハか思ふ笑聲よ入相ざる船と岡との兩國川人ハ山あす滑稽笑話。草稿のこらを出来てあれど。丁数餘り延る故三編の追加二冊引續さうり出し申し候下。ある如く。〜。兩國へ押出せし卒八が。婦人姿を見たサの余り。彼の老母が後より來たり。往來ハ驚き。其中で親子のもんちやく何んや彼ぢやと。遂ハ言葉のはし争ひ。と船なげで落し女と。惡落のせし西瓜舟。打まけられし赤恥の度置を。着る柳橋。何の波風なく程に。腰骨折んじ其痛サ。可笑サ。猶萬事追加の内。〜。第二編の追加ハ滑稽影射中。〜。最卑近目續て相違ナ。出版可仕。〜。其。〜。御求本願い。

八笑人三編追加序

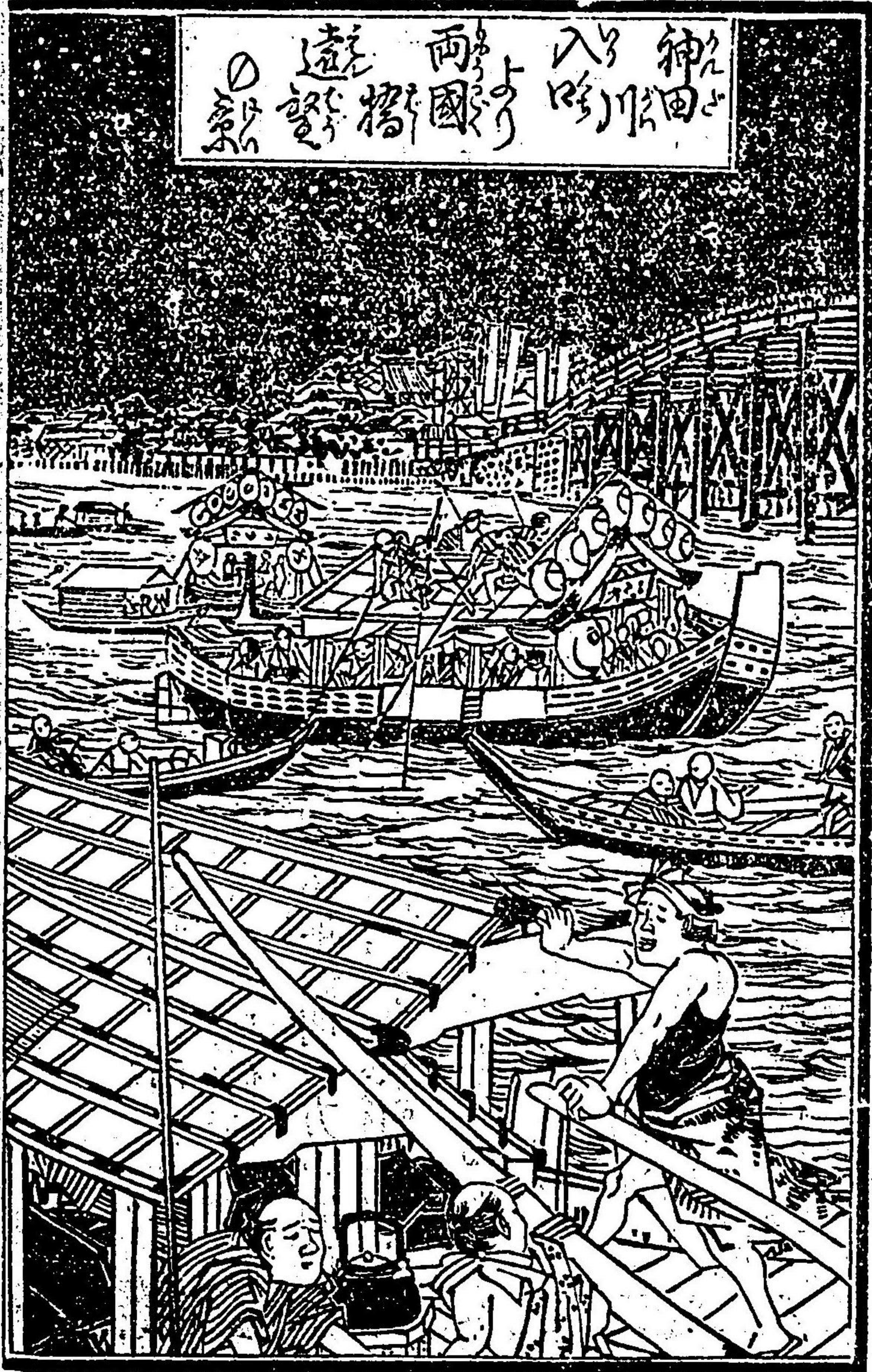
稚女の唄ふ曰。兩國橋長いく御馬で廻歟。お駕籠の中より一寸視のからくりのかたのらに紙代板木價と呼者あり。是何柱か張置く花曆追加の三編間ちッて十三が月の御調法。年徳明の方に向ひて涼みの舟の乗始よと。たいらよと。する舳の舟足も。水面沿くと。て瀧亭鯉丈ぬしの滑稽。爰に百艘のふかさをたをつらねたるも。誠に大江都の繁榮。其名高雄丸の屋形の邊りあり。花火の光り。もみぢを照し。吉野屋が屋根舟に。櫻の紋付たる藝妓。花あり。拳酒の一調子高くとりあけたる。淺間ヶ嶽の投節めて。イヨ柳橋の聲諸共。み船宿の妻。舟歟〜と呼かくる川端歩行。野幫間の岡釣。うろ



○花屋八笑人

第三編追加

○序三



○花屋八笑人

第三編追加

○序一

○花暦八笑人

第三編追加

○序五



○花暦八笑人

第三編追加

○序四





く舟の火かけより。客を見つけて飛乗の。二人舟頭。脇櫓もおして。
 すいさんの立賣と古き地口も折みふれては。一ツの面と二ツ目。
 棹堅川のもやひ綱。解て流して涼風を橋間お繋ぐ首尾の松。陰芝居
 の聲色の三座も爰に浮ぶかど。當りの舟の柏子幕。暫時時をうつし
 たる。水鏡のめりやすみて。八笑人も志ようらん有れど。ホ、敬白

富士筑波かざす扇もふた國の

橋にたゝめる風の涼しさ

琴通舎英賀

花曆八笑人

第三編追加

江戸 灘亭鯉丈子著
 東京 深川梅園翁閱

古き漢書にも。書ハ言葉不尽。言葉ハ意を不尽とやらん。况也空氣の八笑人。心の不
 足趣向を設。月花雪の苦世界を。そげた積りで諸人を。一番はめて樂まんぞ。人を祈り
 穴ニツ。兩國川の涼みのもよふし。彼の頭取の左次郎が。池の端の隠宅にて宵に仕組
 し手等の通り。衣裳かづらも借集め。其他調度揃ひしかバ。サア大概是で宜らうが
 あは。むづかしいの。首斗りだ。なんと白上りの浴衣に。黒緋子の帯へ。此首をすけても。
 うつらうか。然バサ。底ハちツと。おぼつかねへもんだテ。何サ随分おぼつくよ。
 何にぞろ。一ツヤツて見てくんねへ。ついぞねへ事。夕ハ白粉が乗かねた様だツケ。香
 七。知れた事よ。ついぞ有た事も無ッて。ハッ寒の河原四三ばつで。恐れるぞ。辛ハ「
 「ヲヤろういふけれど春中香公が所の茶ばんに。わかるぞ。した時ハ。すツぱり仙女香が。
 のツたぜ。一よ、そりやア違へね。白粉が乗たに。齒が反てゐるか。見物が。乗た

り反たりして笑たツケ「へん。うねめ。今にすツかり拵へて見世する。真の事だが」眼七「モウ驚愕のぞめんだ。夕部でこりくした」左次「サア、狂へ面を以て来さッし。やッて見よう」平八「サイちツと。おまち。か、みをとつ」左次「なんのうに塗せるから。鐘が入るものか。早く来さッし」平「サイ」左次「サアやッておくれ」下向合てゐる顔をつくくと見て「ア成程。バヤつまらね。面付ダツこれでま。女形を思ひ付といふ。不覺だ。ばか。くしい」平八「何の事だナ。今更そんな氣のひけた事を云てくれる事。ハね。へッナ。そして斯くばでまけ」左次「見れば路考た。とッて。ちツとの荒い見へるだらう」出目「其サ。路考のあらぐらゐな所が。せめて一ヶ所あれば。安心だけれど。如何にまても。わんまり所得のね。顔だ」平「へん。顔に鳥居の有るの。弁天様斗りだ。アア大概よけなして置て。先早く塗て見て呉ね。これでも帽子の下でぐツと。ると。美しくなるよ」左次「イヤサ手めへ斗り知た様よ。むせらう。下々またじめといふけれど。下で出目なる日よ。紫帽子を掛けおやアならね。うさすると。ハイ歌右門のおわらい草と

へ見へるが。只の女との見へね入せ」平「ほんまそなたツケ。それだけの舞臺の作はある野郎」野郎「何のぶてへの作りも。大笑ひだ。びてへなつらをして居ながら。いけッ小まやくな事をいへねへで。どうでも宜様拵て貰ハッし逆も目が釣上た。とッて。釣下した。とッて。何律發な面が出来るものか」平「やッぱり。平八の面にまがあるへん」平「もう。面の事ハ。加減よ。了簡して下ッし。どうも是迄にして止られもせず。首をすげかへるも。乙甲だから。どうも仕方がね。傍からその口や。かましく云れると。氣が引て舞臺が動みにくい」平「うげね。違へね。是からちツとツ。宜所を見出して。はめてやるへん」平「イヤ」平「喝采」平「の。お聲が便りおやア。是ハカンカチ太鼓を借て行るか」平「いにやヨ。笑談でいねへ。維令限の太夫た。とッて。切幕を出ると。濱く」平「大明神さま。〜と。響ら控るのら。々ツと氣が引立て。狂言も格別よく出来るの。ろう云はずに其所へ出ると。チャチャ妙なつらだの。ヤレ大そうなそツ齒だの。と云れて見ねへ。サアひるんで狂言がさッぱり出来る事でいねへ」出目「うれでも路考の妙